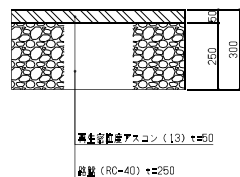


鋪裝

アスファルト舗装 $S=1/20(1/10)$

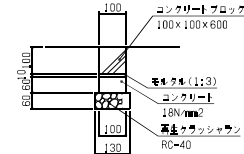


砂利舗装 S=1:20 (1:10)



縁石

境石 S=1:20 (1:10)

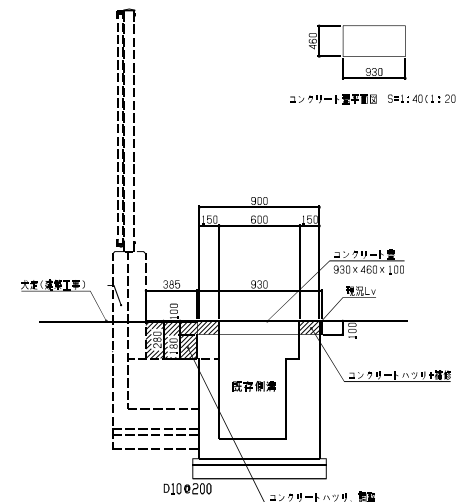


(注) 各ブロック間には、目地モルタルを敷すこと。

材 料 表		(1 m 当り)	
品 名	形状寸法	数 量	単 位
クラッシュヤシ	RC=40	0.008	m ³
コンクリート	18N/mm ²	0.006	m ³
モルタル	1:3	0.001	m ³
コンクリートブロック	100×100×60.0	1.65	本
塗 料		0.120	m ²

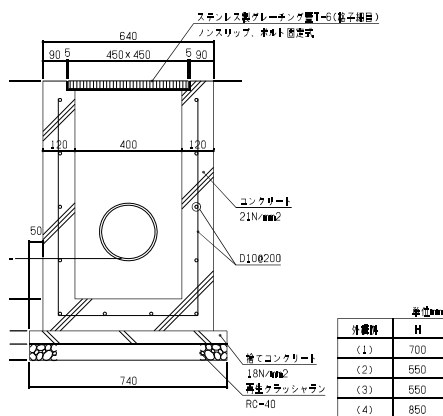
コンクリート倒壊

コンクリート側溝蓋(1) S=1:40 (1:20)

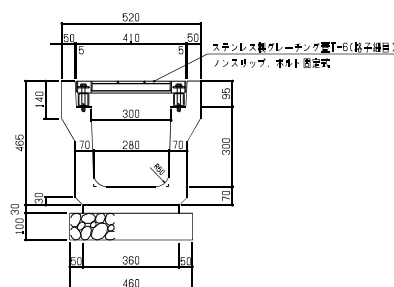


雨水排水

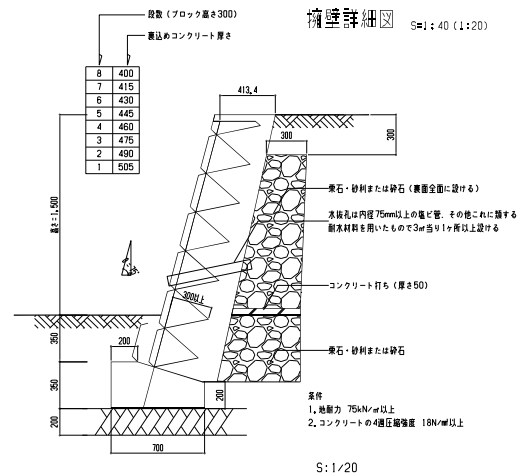
外様机 S=1:20 (1:10)



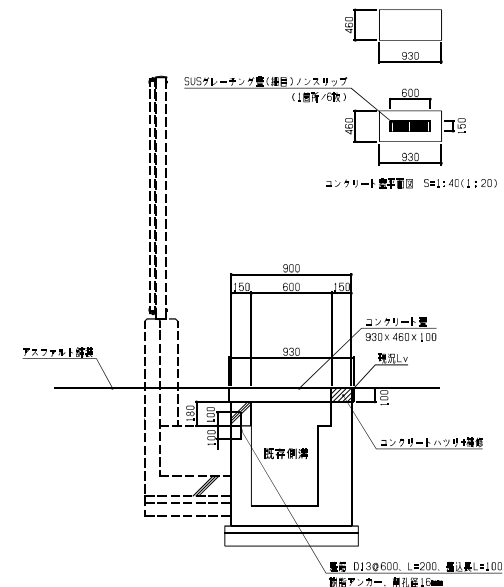
U形側溝 S=1:20 (1:10)



擁壁詳細図 S=1:40 (1:20)

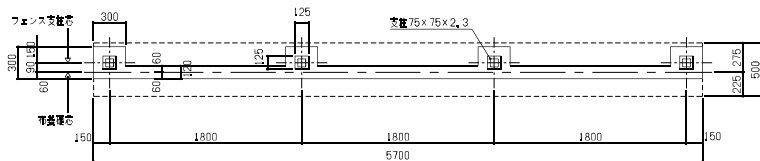


コンクリート側溝蓋(2) S=1:40 (1:20)

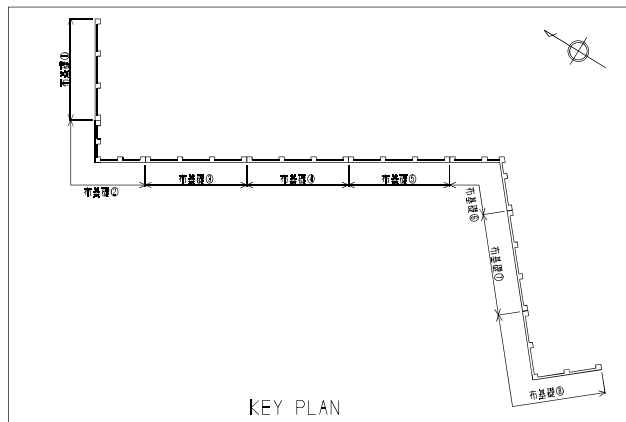
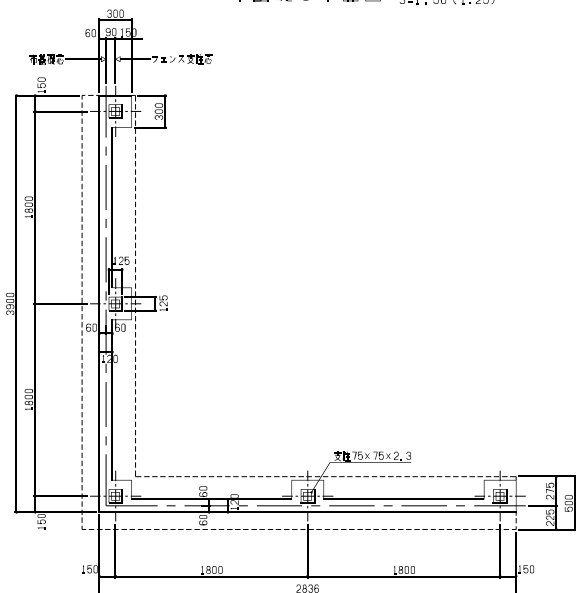


布基礎詳細図

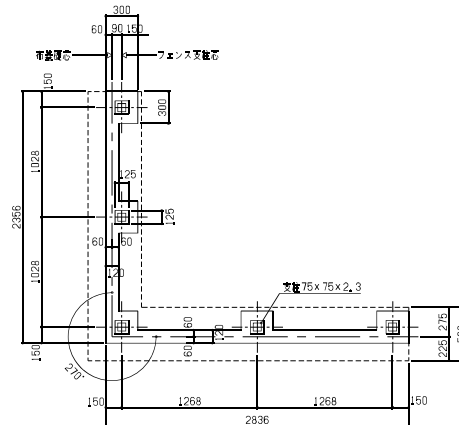
布基礎①③④⑤⑦平面図 S=1:50 (1:25)



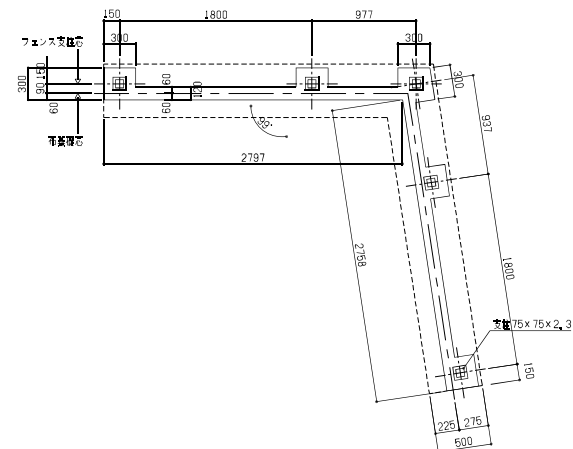
布基礎⑧平面図 S=1:50 (1:25)



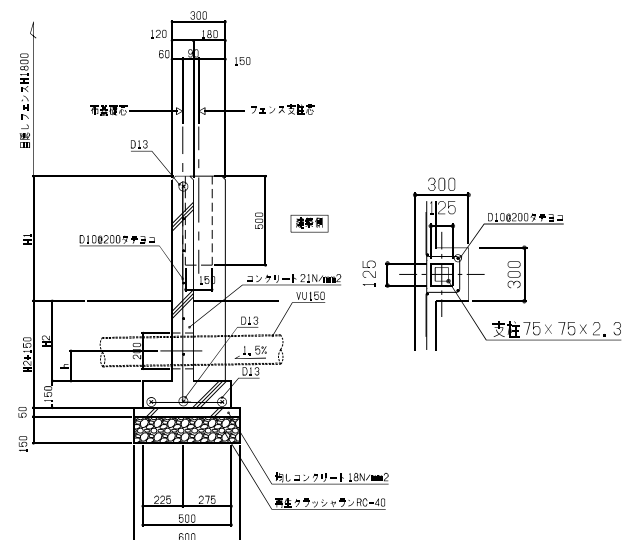
布基礎②平面図 S=1:50 (1:25)



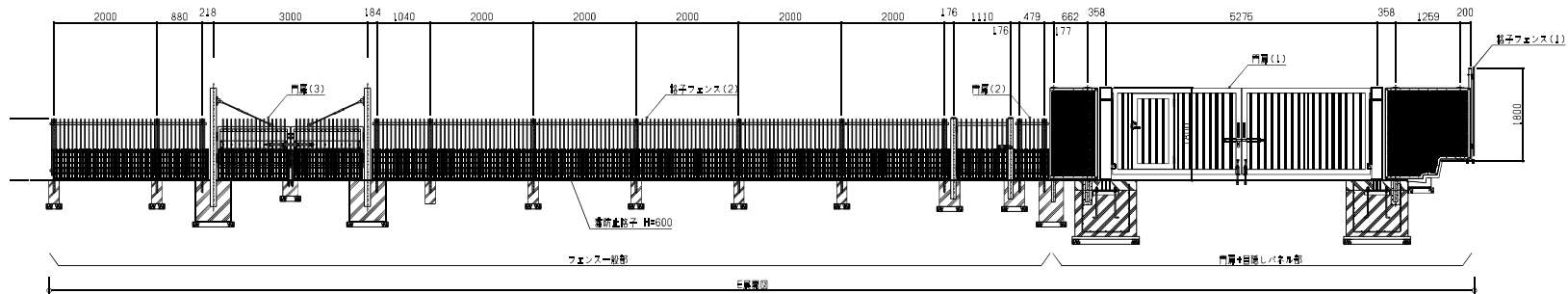
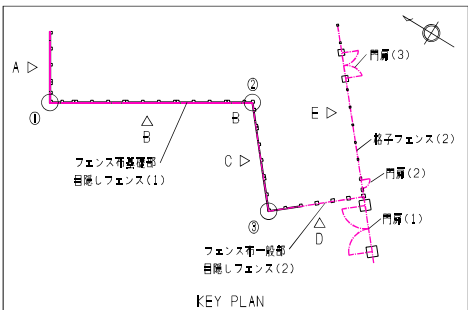
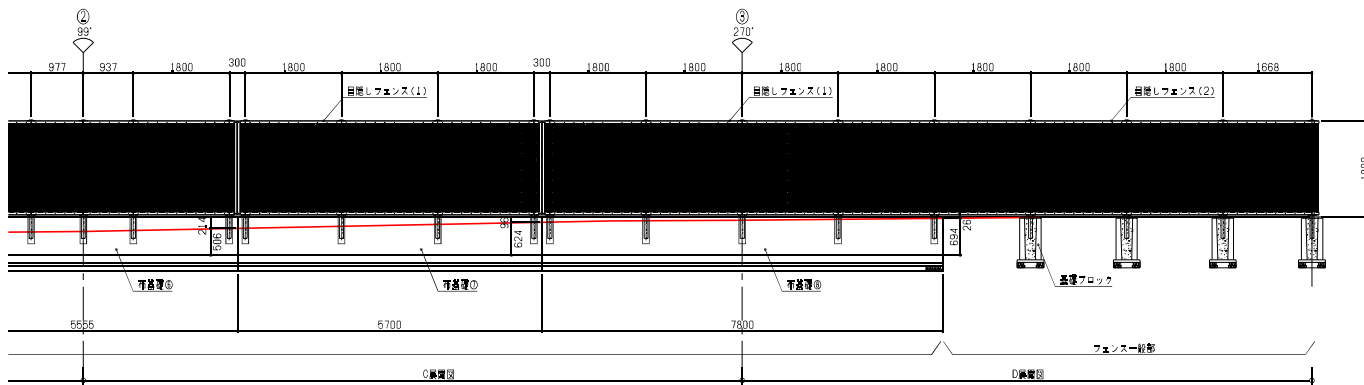
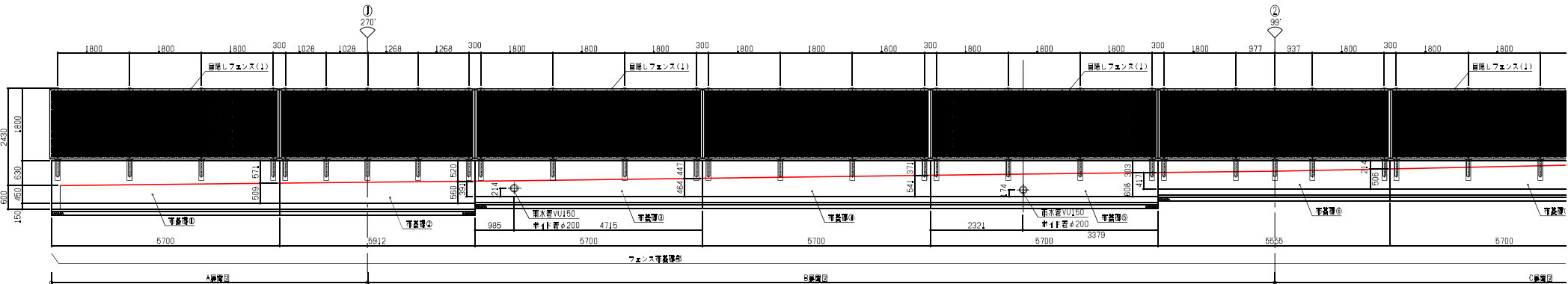
布基礎⑥平面図 S=1:50 (1:25)



断面詳細図 S=1:30 (1:15)

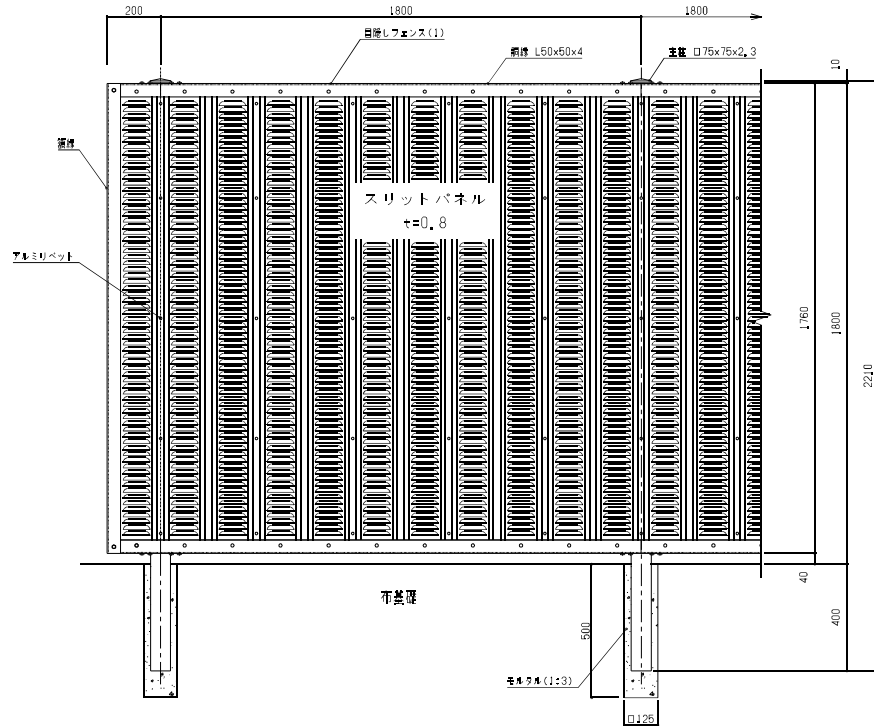


开发层号	H1	H2	h	需要
①	630 ~ 571	450 ~ 509	-	
②	571 ~ 520	509 ~ 560	-	
③	520 ~ 477	391 ~ 464	214	面水潜水资源
④	477 ~ 371	464 ~ 541	-	
⑤	371 ~ 303	541 ~ 417	174	面水潜水资源
⑥	303 ~ 214	417 ~ 506	-	
⑦	214 ~ 96	506 ~ 624	-	
⑧	96 ~ 24	624 ~ 694	-	

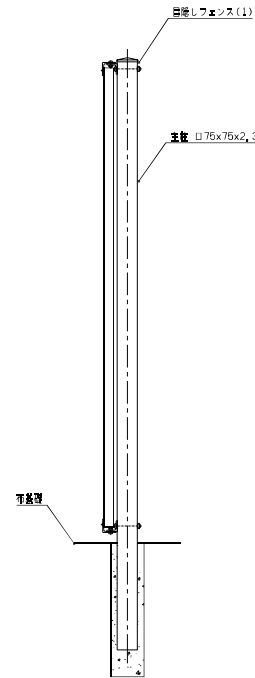


フェンス布基礎部

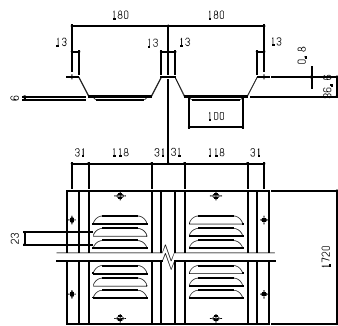
パネル：沿道正統めっき鋼板 (JIS 53302)・サリエス・防振耐腐食塗装
 柱：一般鋼骨角形鋼材 (JIS 53466)・サリエス・防振耐腐食塗装
 胴縁：一般鋼骨角形鋼材 (JIS 53101)・サリエス・防振耐腐食塗装



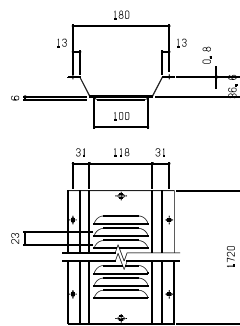
正面図
(S=1/20)



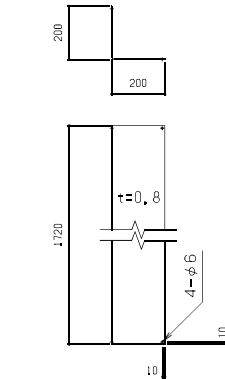
側面図
(S=1/20)



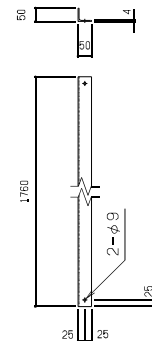
パネル詳細図



調整パネル詳細図

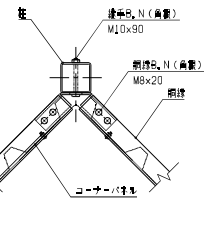
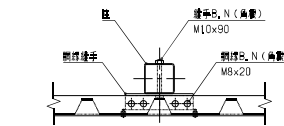


コーナーパネル詳細図

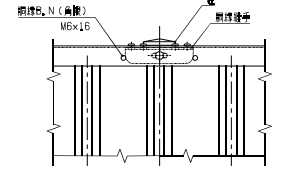


縁縁詳細図

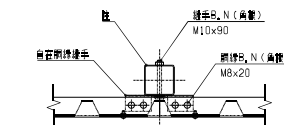
(設計条件) 風荷重：昭和57年改正 建築基準法・同施行令に基づく風圧力に準拠。



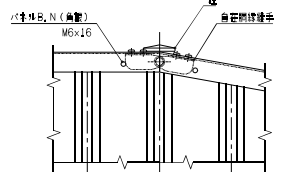
隅取付詳細



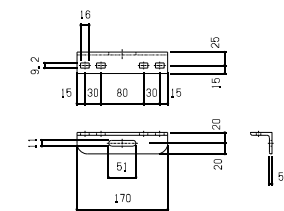
柱・胴縁取付詳細



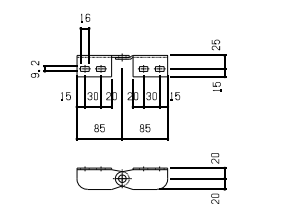
柱・胴縁取付詳細



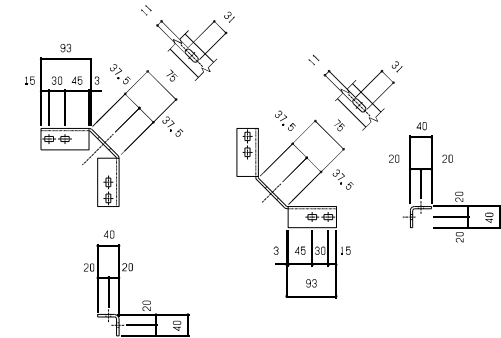
自在胴縁継手取付詳細



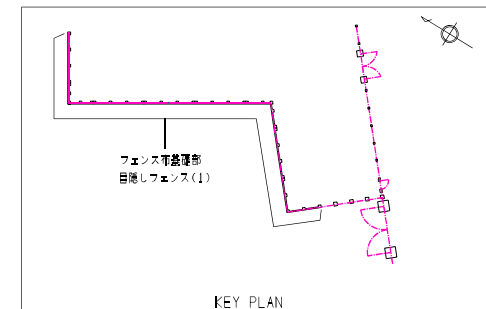
自在胴縁継手



自在胴縁継手

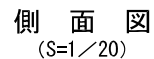
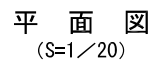


隅取付詳細

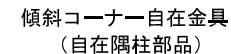
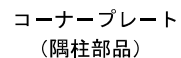
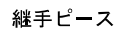
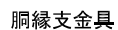
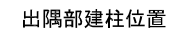
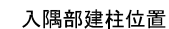


KEY PLAN

酸：異性体特用無形銅管（STKMR）+ポリエチレン樹脂製異性体特用
 銅管：異性体特用無形銅管（STKMR）+ポリエチレン樹脂製異性体特用
 酸子：異性体特用無形銅管（STKMR）+ポリエチレン樹脂製異性体特用



格子取付詳細

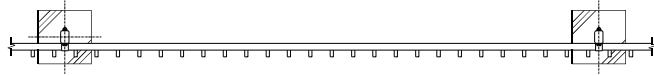


(設計条件) 風荷重: 昭和57年改正 建築基準法・同施行令に基づく風圧力に準拠。
(基礎条件) 長期許容地耐力98kN/m² の場合。

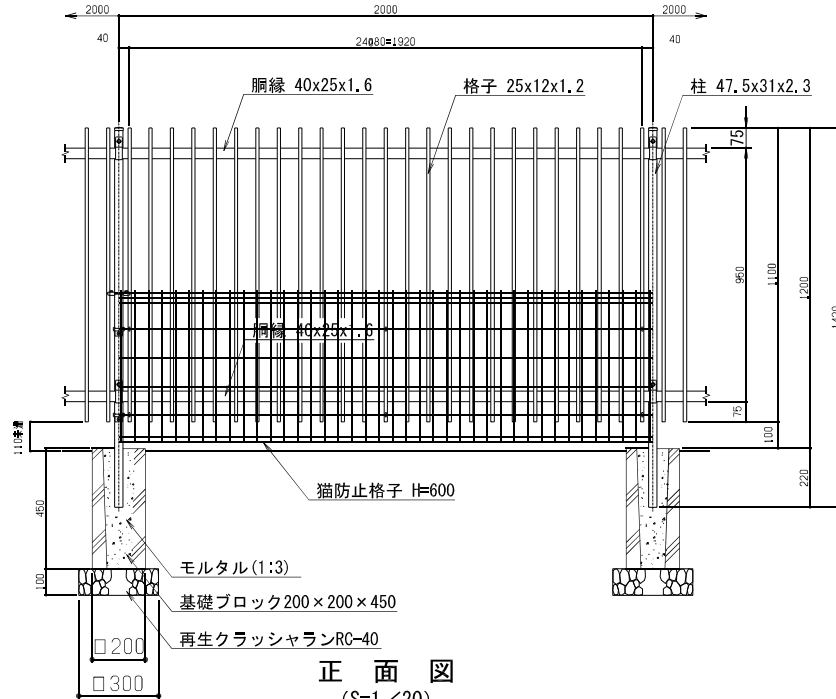
[illegible]

格子フェンス(2)

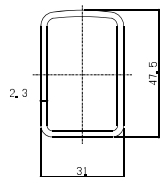
図：鋼製鋼骨造り鋼骨(STEAM)4等リニア4等鋼骨造り鋼骨
 図例：鋼製鋼骨造り鋼骨(STEAM)4等リニア4等鋼骨造り鋼骨
 図例：鋼製鋼骨造り鋼骨(STEAM)4等リニア4等鋼骨造り鋼骨
 図例：鋼製鋼骨造り鋼骨(STEAM)4等リニア4等鋼骨造り鋼骨



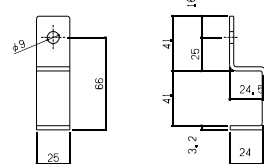
平面図
(S=1/20)



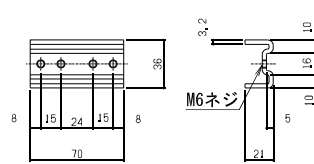
正面図
(S=1/20)



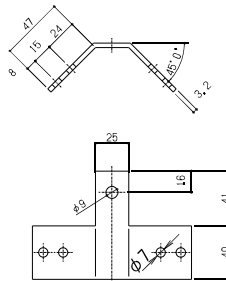
柱断面図
(S=1/2)



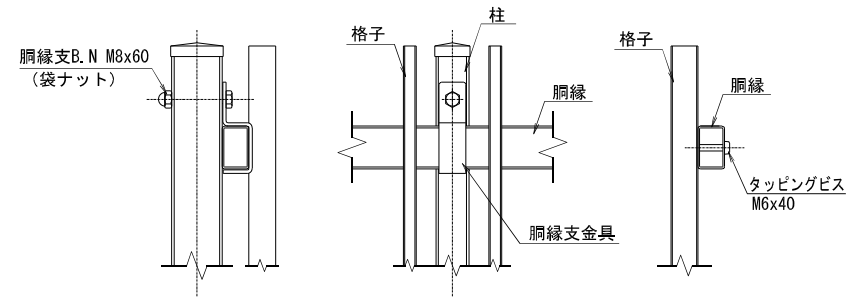
胴縁支金具



継手ピース

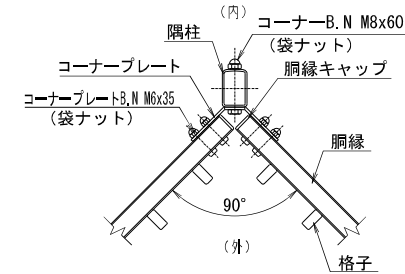


コーナープレート
(隅柱部品)

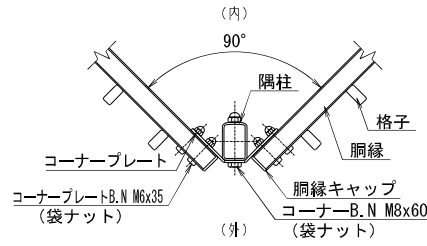


柱・胴縁取付詳細

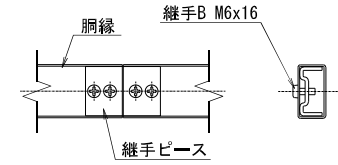
格子取付詳細



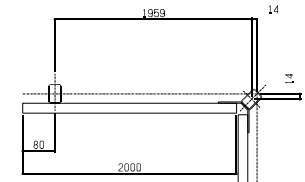
隅柱取付詳細(入隅)



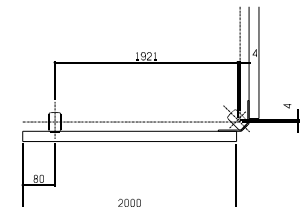
隅柱取付詳細(出隅)



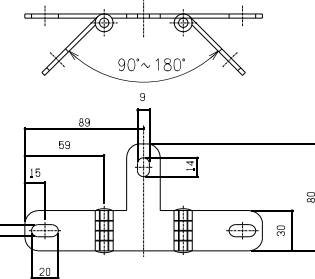
胴縁・継手取付詳細



入隅部建柱位置



出隅部建柱位置

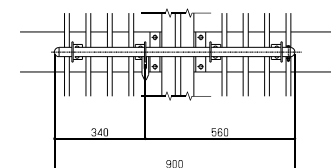
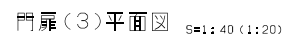


傾斜コーナー自在金具
(自在隅柱部品)

(設計条件) 風荷重：昭和57年改正 建築基準法・同施行令に基づく風圧力に準拠。
 (基礎条件) 長期許容地耐力98kN/m² の場合。

株式会社 日本設計	設計者 設計者	設計者 設計者	設計者 設計者	設計者 設計者	設計者 設計者	設計者 設計者	設計者 設計者
------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

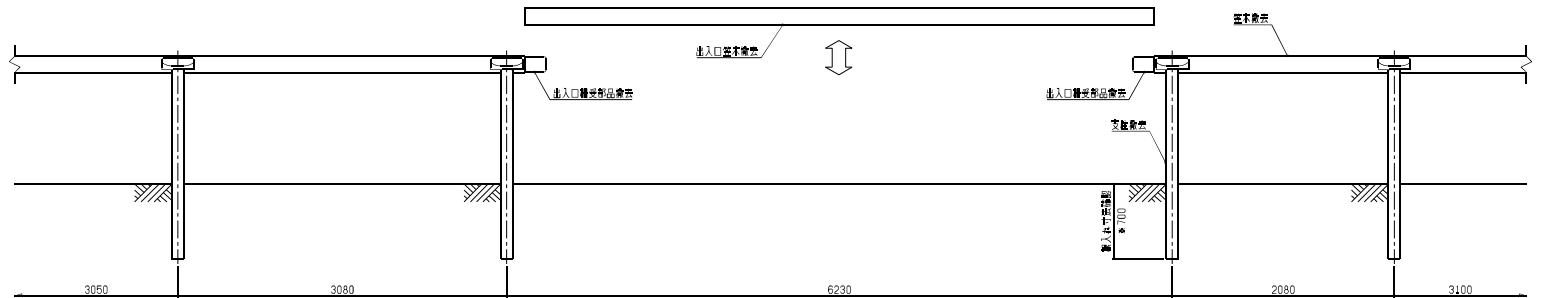
[illegible]



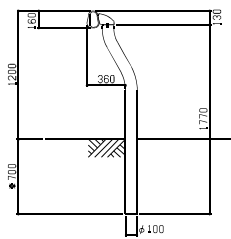
(設計条件) 風荷重: 平成12年改正 建築基準法・同施行令に基づく風圧力による。
基準風速 $V_0=32\text{m/sec}$, 地表面粗度区分Ⅲ の場合。

外柵(既設ゲート閉鎖部)

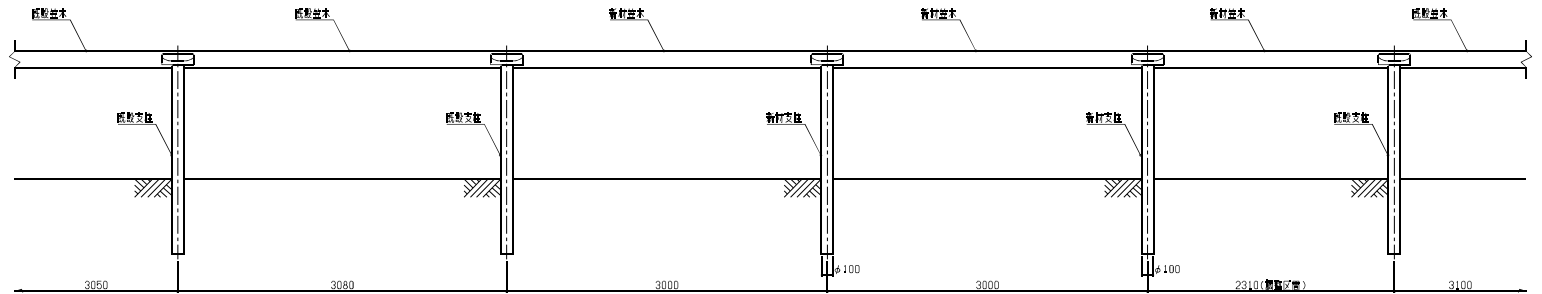
基準：FRP製
実尺：FRP製



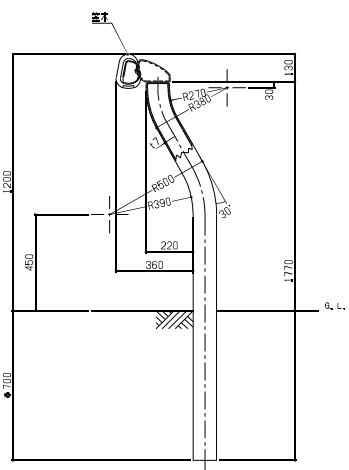
既設ゲート撤去図 S=1:50 (1:25)



側面図 S=1:50 (1:25)

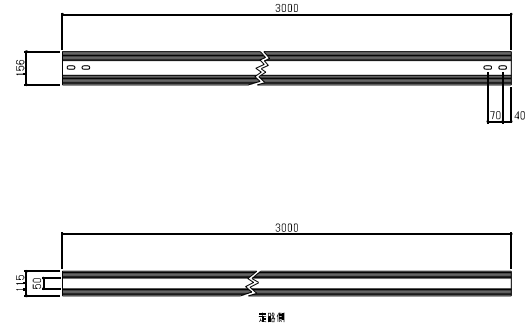
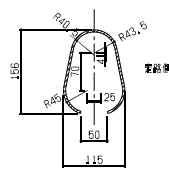
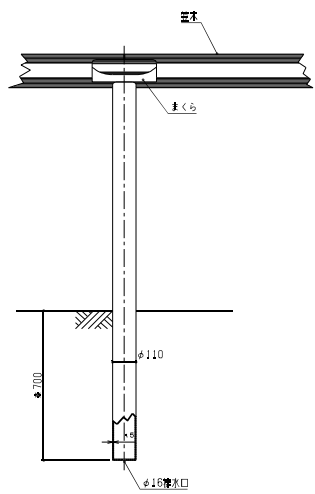


既設ゲート閉鎖部正面図 S=1:50 (1:25)



●700は蓋受撤去後寸法を示すため既設蓋木撤去後に合わせて施工すること。

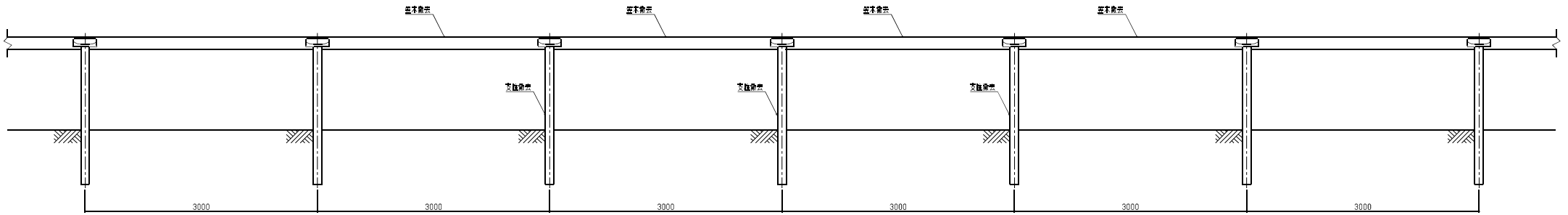
外柵詳細図



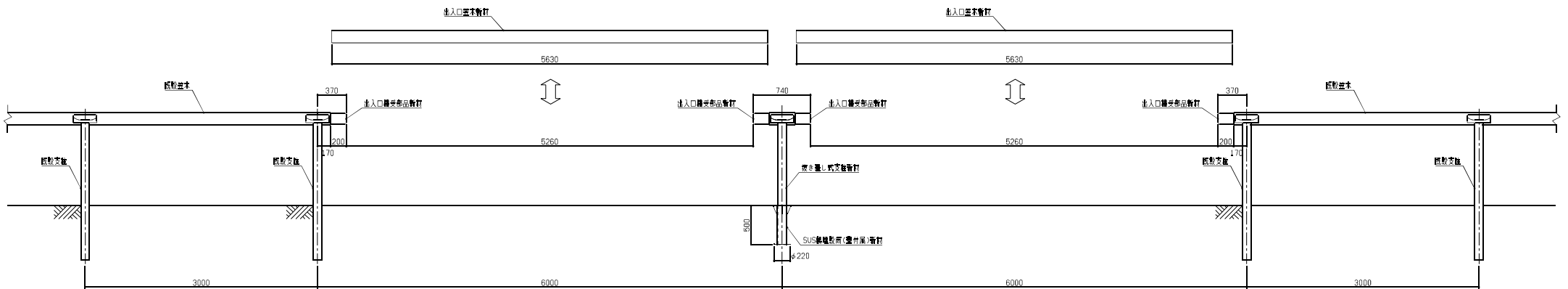
柵木詳細図

外柵(新規ゲート出入口部)

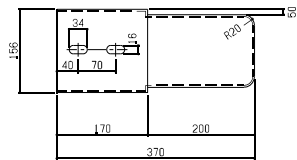
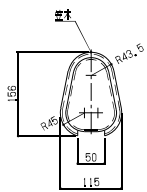
基準：FRP製
実尺：FRP製



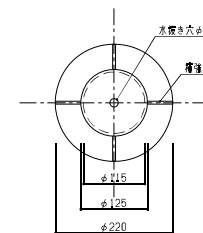
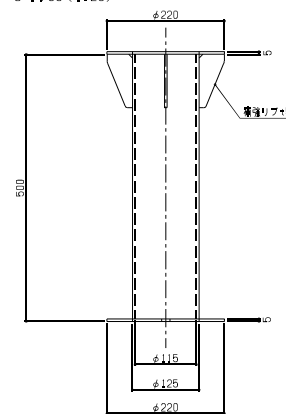
新規ゲート出入口部撤去図 S=1:50 (1:25)



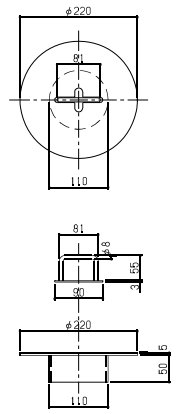
新規ゲート出入口部正面図 S=1:50 (1:25)



出入口柵受部品詳細図



SUS製埋設部詳細図



SUS製蓋詳細図

浦和競馬場発走員詰所建築工事

- ☐ A-1000 建 築 図
- ☒ S-2000 建 築 構 造 図
- ☐ E-3000 電 気 設 備 図
- ☐ M-4000 空 気 調 和 設 備 図
- ☐ P-5000 給排水衛生設備図
- ☐ L-6000 外 構 図

部 位		構 造 詳 別 と 仕 様	
地 上	スラブ	・ R C ・ デッキ (・ 捨て型枠 ・)	
	小梁	・ R C ② S	
	大梁	・ R C ② S ・ S R C ・	
	柱	・ R C ② S ・ S R C ・ C F T ・	
	内装	・ R C ・ C B ・ A L C ② L G S ・	
地 下	スラブ	・ R C ・ デッキ (・ 捨て型枠 ・)	
	小梁	・ R C ・ S ・ S R C ・	
	大梁	・ R C ・ S ・ S R C ・	
	柱	・ R C ・ S ・ S R C ・ C F T ・	
	内装	・ R C ・ C B ・ A L C ・ L G S ・	
屋 根	・ R C ② S ガルバリウム鋼板 ○防水仕様 (透気アスファルトルーフィングシート)		
外 装	・ R C ・ C B	・ ガルバリウム鋼板	
	カーポートオーラ	(・ A L C ・ L G S)	
地 基	・ 杭	○地盤改良 (柱状改良) ・	
	一端基礎	・ 橋渡スラブ ○土間コンクリート	
基 礎	○連続基礎	・ 線架	
	・ 独立	・ 複合	
	○連続	・ ベタ	
	・ 杭基礎		
計 画 表 現 方 式	○配筋構造	・ 免震構造	
	○耐力性能の分類	・ 耐震構造	
	・ 1 階 (1=1, 50)	○ 2 階 (1=1, 25) ・ 3 階 (1=1, 00)	
	・ 特等すべり特設 :		

[illegible]

多雪区域の指定		
・ 有り ○ 無し		
積雪量	単位重量	設計荷重
30 cm	20 N/m ² /cm	600 N/m ²

地表面粗度区分	基準風速	風荷重特定用温 帯気象高さ	風荷重の 伝達 割合	速度圧	風力係数
Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ ベースス・階	34 m/s X方向: 0.03	3.95 m Y方向: 0.19	0.19	828 N/m ²	1.7

6 地震力

数値応力変換等計算、保有水平耐力計算

⑨ 地震係数法を用いるによる・予備応答解析結果による・

地震係数		1	
地盤種別		第 2 種 (T _{CE} = 0.6 秒)	
繰返し水平耐力係数		0.3 (必要保有水平耐力定算 必要 C ₀ =)	
		X 方向	
一次固有周期		0.13 (⑨計算・精査)	0.13 (⑨計算・精査)
応答特性係数		1	
降伏応答係数		1/1090 < 1/200	
降伏特性係数		D ₀ 1/634 < 1/200	
膨張特性係数		F ₀₅	
保有水平耐力 > 必要保有水平耐力 (OK)		>	

時刻歴計算

地震係数		第 種	
地盤種別		・予備応答解析結果による・AI分布	
配筋用せん断力分布		K =	
地下層の奥度		G L = m	
工学的基礎		・角骨梁・サイト裏・異断面梁	
掘削土東流		異変力特性	
掘削土東流		変力特性	
減衰特性		X 方向	
固有周期 1 次 T(秒)		Y 方向	
2 次			
種 地盤時	層間変形角制限	< 0.05	< 200
	ベースシア係数 OB		
造 地盤時	層間変形角制限	< 100	< 100
	各層の層としての応答変位率	< 2.0	< 2.0
	土の応答変位率	< 4.0	< 4.0
	最大軸荷比		
ベースシア係数 OB			

[illegible]

土圧係数	地下外壁用 KN=	擁壁用 KA=
地下水水位	孔内水位 設計GL-2.39m	設計水位 設計GL-2.35m

◎直接基礎
許容地耐力(kN/m²) 長期:70 短期:110 終局:-

杭 徑	斷裂支持耐力 (kN/本)			斷裂引張力 (kN/本)	
	長期	短期	終局	短期	終局
φ					
φ					
φ					
φ					
φ					

調査内容	☐ サウディング (※ 標準費+試験料) ☒ 地質調査 (※ 内訳+標準費+試験料) ☒ 土質試験 ☐ 平面図調査 ☐ 平面断面図調査
調査年月	2021年4月～7月
調査会社	京都地盤工学サウタム株式会社
ボーリング本数	3 本 既設ボーリング本数 0 本
支持層	シルト質粘土 (Dc3) (設計値 L=17.94 m)
ボーリング柱状図	図面番号 S-2016
液状化の有無	150gsl / 有り (液状化率:)
	☐ 無し 350gsl / 有り (液状化率: シルト質緑砂 (Dc2) Day=1.4cm、液状化の程度: 軽微)
	☐ 無し

・建築基準法	・届出期・時刻歴応答解析（60m以下）	・免責	・耐火
	・野透番号	取得	年 月
	・大臣認定番号	取得	年 月
・その他	・コンクリート構造・鋼構造		
	・認定番号	取得	年 月

液状化対策の有無 ○ 有り ・ 無
工法、施工範囲、仕様及び計測、試験等 ・ 図示 ○ 以下に記入
液状化層(シルト質細砂、Ds2)以深の地層(シルト質粘土、De3)を支持層とする地盤改良(深層混合処理工法)

項 目	特 記 事 項
● 記載規則	(1) 各特記の項目については ● の付いたものを選択し、○ の付いたものは適用しない。 特記事項を ① ○印の付いたものを選択する。 ② ○印の付かない場合は、●印の付いたものを適用する。 ③ ○印と●印の両方は○を選択し、●は適用しない。 ④ ○印と●印の付いた場合には適用する。 各項目で規定されている「建築士・監理士・設計士」のうち最も高い職種の当該項目、当該専門または当該業種を示す、性能認定と製造適合を記入する建築士番号と音読みし、「株式会社」等の略称は省略する。 (注)は欄に併記して前載されたものを示す。 (加括)は、該当する事項の項目は削除し、当該項目を代替して適用することを示す。 (減括)は、該当する事項の項目は削除し、代替する項目を設けなければならないことを示す。 「『建築関係用語』」とは、『建築関係用語』のなかから適用項目の決定に相当する語句を用いる。 「『建築用語』」とは、本工事の諸仕様を代用した書きいり。 (1) 図説書には「図説書」と印刷される。 (2) 国土交通大臣官庁定款下第8号建築「公共建築物標準仕様仕様書(建築工専則)(平成21年改訂)」およびその4章から7章に亘る12箇条より建築工事標準仕様書を作成する。 (3) 図説及び標準仕様書と相違している事項は、第五頁「[得意]建築工事特別共通仕様書（令和2年度）および仕様書」による。 (4) □はグリーン購入法進捗品目を表す。なお、特記製品品目が台かの判断基準は環境情報による。 (5) 注は標準仕様書記載事項では、注意すべき事項を示す。 本工事に関するは、以下の各事項を必ず参照する。 国土交通省建築工事標準仕様書 国土交通大臣官庁定款下第8号建築「建築工事標準仕様書(令和元年版)」 日本建築学会編纂「建築工事標準仕様書 相関訳」のうち以下 JASS5(2009)、JASS5(2018)、JASST(2009)、JASSA(2013)、JASST1(2005)
● 仕様書	
● 参照すべき基準	

● 特設工事	・プレストレストコンクリート特設仕様 (図面番号) による ・射撃部材特設仕様 (図面番号) による ○ 地盤改良特設仕様 (図面番号 S-2017) による (図面番号) による
--------	---

○ 施工時に立会いが必要な工事	構造監理担当者、又は構造監理者が朝日建設品に監理検査その他「工事」に先立って行う検査」とは別に、施工の途中に立会いが必要な工事は下記とする。 ・ 溶接機 (部位：溶接) ・ コンクリート打設 (部位：図示) ・ ポストテンション導力導入確認 (部位：図示) ・ (部位：図示)
-----------------	--

4.2 土質試験及び報告書					
○ 4.2.2 試験坑	(付加)	(1) 試験坑の位置、断面及び寸法	☆図面	・適用しない	
○ 4.2.3 坑の基礎試験	(付加)	(1) 試験の目的と本坑の用途	☆図面	・適用する	
		(2) 坑の掘削状態、坑の底面地層割製	☆図面	・坑の水平断面割製	・坑の斜き抜き割製
		試験の方法	☆図面		
		(2) 試験の本数、載荷荷重等	☆表様(φ)	箇所	最大載荷荷重()
		試験の位置	☆図面		
		(3) 報告書の記載事項等	☆図示		
○ 4.2.4 地盤の載荷試験	(付加)	(1) 平板載荷試験を行う			
		試験の方法	☆(公社)地盤工学会基準 JGS-521-2003に準拠		
		(2) 試験荷重	試験値を(σ=)	箇所	
		載荷荷重	最大載荷荷重(kN/m ²)	載荷板	φ300φ
	(付加)	(4) 報告書の記載事項等	☆(公社)地盤工学会基準 JGS-521-2003に準拠		
4.3 部 屋 堅 固 コンクリート地盤					
○ 4.3.1 一般事項	(2) 工法	・セメントミルク工法	・特種送込圧注法		
○ 4.3.2 材料	(1) 骨材	・P・H・C杭	・P・R杭	・S・C杭(鋼管材料)	・SKK400
		性能及び強度等級による区分等	☆図面		
		(2) 杭の寸法、継手の箇所等	☆図示		
		杭先端部の形状	☆図面図解		閉鎖もしくは平頭部
○ 4.3.4 セメントミルク工法	(3) 充填剤の位置及び量				
		(6) 水、空気含率、未硬化への吸入による	☆図示		
		杭の水平方向の位置ずれ許容差 4.3.10cによる			
		組積みの位置及び平面内での垂直軸線			
○ 4.3.5 設計上の注意		・H30国土交通省告示第111号第4項による地盤の耐垂下支持力係数α=50を採用できる工法			

	(1) 工法（原材料は製造条件に適合するもの）	番号：
	鉄筋固定法	●使用しない
	(3) 支持棒の位置及び材質	
	(4) 支持棒の径と間隔	●表示
	(5) 鉄筋の水方向の位置ずれの限度	4.3.10以下
○ 4.3.6 縦手	(1) 工法	●アーク溶接
	(2) 無接合継手の工法	●無接合継手
○ 4.3.8 鉄筋の埋置等	(1) 鉄筋の埋置	●表示
○ 4.3.9 第3項	(付加) 鉄筋の埋置は100mm以内、水平方向のずれは100mm以内とする。但し、連続基礎で一列に鉄筋が埋置されている場合の埋置方向と垂直方向のずれ、及び独立基礎で2本以上の鉄筋座落の場合のずれは50mm以内とする。これを越えた場合は適合性適合判定と判断し適切な処置を行う。	

○ 4.4.3 材 料	(1)材料 ・ SSK400 ・ SSK490 (付加) (3)先端部の形状 六角型 ・ 開放形 先端部の補強 六角型	
○ 4.4.4 工 法	(1)工法 (積材料は暫定条件に適合するもの) (3)支持層の位置及び土質	名称: _____

○4.4.5 手 手	(1)工法	☆アーク溶接	・無溶接継手（工法： ）
○4.4.6 杭壁の処理等	(1)杭壁の処理	・図示	☆切断しない
○4.4.8 杭壁の処理	(付加) 4.2.10	・本方タイプフリクション対策処理	・
○4.4.9 掘り残高	(付加) 4.2.10による。		

○ 4.5.1 一般事項	(2) 工法	・アースドリル工法 (安定液使用時・無水掘削) ・リバー工法 ・オールケーシング工法 (孔内の水質 行う・行わない) ・掘削用閉鎖コングリア工法 (調査用材料・\$3000・\$306400・ ・塩化法 使用しない ・使用しない)	
(付加)	(※) 財 日本建築センター等により評価された工法		
(付加)	4 支持層の位置及び土質		
○ 4.5.3 場所打コンクリート 杭の取組等の掘削作業 を行う旋削装置者	(1) 旋削装置者名	・JIS Z 3801 ・JIS Z 3841 仕様付加欄 ・行 (試験方法)	
○ 4.5.4 材料その他	(1) 鉄筋	種類	・SD295A 径 () ・SD345 径 () ・SD390 径 () 径 () 事前の加工及び組立 最小径より厚さ 鉄筋かこの構造 溶接 前ごとの洗浄 ・JIS 準拠 ・非自動溶接
	(2) コンクリート	セメントの種類	高炉セメントA種 ・シリカセメントA種 ・フライアッシュセメントA種 高炉セメントB種E ・AE剤 ・AE剤・減水剤 ・27N/m ² ・A種 ・B種 ・150N 鋼線鉄強化筋正張 (S級) は野指書の指定による。
	(3) 鋼管	材料	・指定のない場合 ・30N/m ² ・ N/m ² ・\$30400 ・\$30480
○ 4.5.4.5.5.6 (付加) リバー工法 ・オールケーシング工法 場所打閉鎖 コングリア工法 及び塩化工法	(2) 試験結果の判定方法は下記の方法により行う。 方法 ・受組音波測定器による測定 (付加) (3) 水質 支持層への侵入長さ ・水平方向の位置ずれの精度 ・4.5.10による 判定 ・行う ・行わない 方法 ・受組音波測定器による測定 ・前回数 ・全数 ・1/3		
○ 4.5.9 安定液の管理	(付加)	1次孔底処理方式	安定液循環方式 ・逆流方式 1次孔底処理後分秒率及び最終分秒率 ・分秒率1%以内
(付加)	1次孔底処理後分秒率及び最終分秒率	・分秒率1%以内	
○ 4.5.10 掘削精度	(付加)	砂分率を決定するサンプルの採取回数	・1回 ・2回 ・3回 ・4回 ・5回 ・6回 ・7回 ・8回 ・9回 ・10回 ・11回 ・12回 ・13回 ・14回 ・15回 ・16回 ・17回 ・18回 ・19回 ・20回 ・21回 ・22回 ・23回 ・24回 ・25回 ・26回 ・27回 ・28回 ・29回 ・30回 ・31回 ・32回 ・33回 ・34回 ・35回 ・36回 ・37回 ・38回 ・39回 ・40回 ・41回 ・42回 ・43回 ・44回 ・45回 ・46回 ・47回 ・48回 ・49回 ・50回 ・51回 ・52回 ・53回 ・54回 ・55回 ・56回 ・57回 ・58回 ・59回 ・60回 ・61回 ・62回 ・63回 ・64回 ・65回 ・66回 ・67回 ・68回 ・69回 ・70回 ・71回 ・72回 ・73回 ・74回 ・75回 ・76回 ・77回 ・78回 ・79回 ・80回 ・81回 ・82回 ・83回 ・84回 ・85回 ・86回 ・87回 ・88回 ・89回 ・90回 ・91回 ・92回 ・93回 ・94回 ・95回 ・96回 ・97回 ・98回 ・99回 ・100回 ・101回 ・102回 ・103回 ・104回 ・105回 ・106回 ・107回 ・108回 ・109回 ・110回 ・111回 ・112回 ・113回 ・114回 ・115回 ・116回 ・117回 ・118回 ・119回 ・120回 ・121回 ・122回 ・123回 ・124回 ・125回 ・126回 ・127回 ・128回 ・129回 ・130回 ・131回 ・132回 ・133回 ・134回 ・135回 ・136回 ・137回 ・138回 ・139回 ・140回 ・141回 ・142回 ・143回 ・144回 ・145回 ・146回 ・147回 ・148回 ・149回 ・150回 ・151回 ・152回 ・153回 ・154回 ・155回 ・156回 ・157回 ・158回 ・159回 ・160回 ・161回 ・162回 ・163回 ・164回 ・165回 ・166回 ・167回 ・168回 ・169回 ・170回 ・171回 ・172回 ・173回 ・174回 ・175回 ・176回 ・177回 ・178回 ・179回 ・180回 ・181回 ・182回 ・183回 ・184回 ・185回 ・186回 ・187回 ・188回 ・189回 ・190回 ・191回 ・192回 ・193回 ・194回 ・195回 ・196回 ・197回 ・198回 ・199回 ・200回 ・201回 ・202回 ・203回 ・204回 ・205回 ・206回 ・207回 ・208回 ・209回 ・210回 ・211回 ・212回 ・213回 ・214回 ・215回 ・216回 ・217回 ・218回 ・219回 ・220回 ・221回 ・222回 ・223回 ・224回 ・225回 ・226回 ・227回 ・228回 ・229回 ・230回 ・231回 ・232回 ・233回 ・234回 ・235回 ・236回 ・237回 ・238回 ・239回 ・240回 ・241回 ・242回 ・243回 ・244回 ・245回 ・246回 ・247回 ・248回 ・249回 ・250回 ・251回 ・252回 ・253回 ・254回 ・255回 ・256回 ・257回 ・258回 ・259回 ・260回 ・261回 ・262回 ・263回 ・264回 ・265回 ・266回 ・267回 ・268回 ・269回 ・270回 ・271回 ・272回 ・273回 ・274回 ・275回 ・276回 ・277回 ・278回 ・279回 ・280回 ・281回 ・282回 ・283回 ・284回 ・285回 ・286回 ・287回 ・288回 ・289回 ・290回 ・291回 ・292回 ・293回 ・294回 ・295回 ・296回 ・297回 ・298回 ・299回 ・300回 ・301回 ・302回 ・303回 ・304回 ・305回 ・306回 ・307回 ・308回 ・309回 ・310回 ・311回 ・312回 ・313回 ・314回 ・315回 ・316回 ・317回 ・318回 ・319回 ・320回 ・321回 ・322回 ・323回 ・324回 ・325回 ・326回 ・327回 ・328回 ・329回 ・330回 ・331回 ・332回 ・333回 ・334回 ・335回 ・336回 ・337回 ・338回 ・339回 ・340回 ・341回 ・342回 ・343回 ・344回 ・345回 ・346回 ・347回 ・348回 ・349回 ・350回 ・351回 ・352回 ・353回 ・354回 ・355回 ・356回 ・357回 ・358回 ・359回 ・360回 ・361回 ・362回 ・363回 ・364回 ・365回 ・366回 ・367回 ・368回 ・369回 ・370回 ・371回 ・372回 ・373回 ・374回 ・375回 ・376回 ・377回 ・378回 ・379回 ・380回 ・381回 ・382回 ・383回 ・384回 ・385回 ・386回 ・387回 ・388回 ・389回 ・390回 ・391回 ・392回 ・393回 ・394回 ・395回 ・396回 ・397回 ・398回 ・399回 ・400回 ・401回 ・402回 ・403回 ・404回 ・405回 ・406回 ・407回 ・408回 ・409回 ・410回 ・411回 ・412回 ・413回 ・414回 ・415回 ・416回 ・417回 ・418回 ・419回 ・420回 ・421回 ・422回 ・423回 ・424回 ・425回 ・426回 ・427回 ・428回 ・429回 ・430回 ・431回 ・432回 ・433回 ・434回 ・435回 ・436回 ・437回 ・438回 ・439回 ・440回 ・441回 ・442回 ・443回 ・444回 ・445回 ・446回 ・447回 ・448回 ・449回 ・450回 ・451回 ・452回 ・453回 ・454回 ・455回 ・456回 ・457回 ・458回 ・459回 ・460回 ・46

● 4-6.2 材料	(1)砂利地盤に使用する場合は「 養生コンクリーション 」と「 コンクリート砕石 」 Ⅲ型を敷く ●基礎下、基礎直上、土間コンクリート下、土に接するスラブ ●図示 (2)砂利地に使用する場合は「 養生コンクリーション 」のみを敷く ●図示 (3)床下防湿層に使用するポリリテンシブフィルムの厚さ ●15mm
● 4-6.3 砂利及び砂利地盤	(1)厚さ ●60mm ●150mm
● 4-6.4 断熱コンクリート地盤	(1)厚さ ●50mm ●60mm Ⅲ型を敷く ●基礎下、基礎直上、土間コンクリート下、土に接するスラブ ●図示
● 4-6.5 床下防湿層	(1)滑潤剤及び範囲 透水性のあるスラブ及び土間コンクリート下（ビッド下を除く）

○ 4.7.1 深礎地素	(付加) 適用範囲 特殊な形や寸法はケーシングを用いて人力または機械により支持地盤まで貫入し、その中に配筋し、コンクリートで打設し、大径のピアを嵌装する地素に適用する。 支持地盤の位置及び露骨 材料その他 4.5.4の規定に準ずる。 コンクリートの層別 中A層 (スラブ厚10mm・150mm) 中高圧セメント砂層・普通圧力ラポートセメント
○ 4.7.2 直換コンクリート地素	(付加) 適用範囲 支持地盤上の材料を土を剥ぎ出し、コンクリートに置き換える地素に適用する。 支持地盤 形状 図面示 配筋 図面示 シールドの覆筋 普通圧コンクリート 敷き層の単位面積 約10kg/m ² 以下 1kg/m ² 骨材の最大径 中 層の厚さ 約150mm

5.附 一般事項	
● 5.1.3 配股検査	(付加) 監査者は配股検査を行い、その結果を配股して、構造監理担当者の署名を受ける。 検査は原則として、全数検査とする。 配股検査項目 1) 配股の種類・種、木・鉄筋・鉄筋間隔 2) 加工形状 3) 補正前後（鉄筋の位置・かぶり・定着長さなど） 4) 留手位置・留手状況 監理者の立会い 検査の結果、不合格となった配股は補正して配股を構造監理担当者に提出する。 構造監理担当者は、配股状況を審査するため、適時に抽出検査を行う。

種類の番号	呼び名 (mm)	種類の番号	呼び名 (mm)
◎30295	D10~D16	•	
•			
• 30245		•	
• 30290		•	
•		•	
•		•	
•		•	

● 5.2.2 溶接金継

補強筋製造会社」の製品を使用する。

種類	網目の形状、寸法、筋筋径(mm)
◎溶接金継	6φ~10φ
・鉄筋格子	

材料検査	受ける。 (付加) JIS規格品については、振込検査証明書または備録できる資料との照合を行う。
------	--

5.3.5 取組の改善と効果の向上	(1) 施設及び活動内容の最もよいと思われる施設及び活動の主体等については、関係者との意見交換等を行うこととする。	(2) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(3) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(4) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(5) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(6) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(7) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(8) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(9) 関係者との意見交換等を行うこととする。
5.3.7 各部配	(1) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(2) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(3) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(4) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(5) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(6) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(7) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(8) 関係者との意見交換等を行うこととする。	(9) 関係者との意見交換等を行うこととする。

[illegible]

① 環境調査 ・環境調査 ・超経路環境調査 ・引張試験 ・機械式観測			② 基礎確認 第三者専門機関と協定する。		③ 土質調査 ・ASR400 ・ASR400 ・ASR490 ・ASR490		④ 地盤の建物 ⑤ 耐地震性 ○SR4000 ○SR4905		⑥ 7.9節 耐地震性 ○7.9.2 耐地震性の評価等 ○7.9.3		⑦ 基礎特等仕様書による（建築基準法第107条による仕様規定の場合） ○下表による（建築基準法施行令第108条による耐震性能確認の場合） 評価 材料・工法 高さ 耐地震性 部位・部分	
⑧ 超経路環境調査 ⑨ 引張試験 ⑩ 機械式観測			⑪ 基礎確認 第三者専門機関と協定する。		⑫ 土質調査 ・ASR400 ・ASR400 ・ASR490 ・ASR490		⑬ 地盤の建物 ⑭ 耐地震性 ○SR4000 ○SR4905		⑮ 7.9節 耐地震性 ○7.9.2 耐地震性の評価等 ○7.9.3		⑯ 基礎特等仕様書による（建築基準法第107条による仕様規定の場合） ○下表による（建築基準法施行令第108条による耐震性能確認の場合） 評価 材料・工法 高さ 耐地震性 部位・部分	

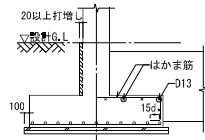
6章 コンクリート工事		6.12節 梁中コンクリート		(付加) (4) 溶接性鉄筋 1 行 1 箇所(鉄筋部断面)及び鉄筋方法: ()		(4) 単軌道ロックワッシャーを使用する場合はスリッ一次等必要取付を要する。	
6.2節 コンクリートの種類及び品質	6.2.1	○ 6.12.2 材料及び割合	○ 6.12.2 材料及び割合	○ 6.12.2 材料及び割合	○ 6.12.2 材料及び割合	7.3節 工作一	7.10節 工事現場施工
6.2.1	6.2.1	6.12.2	6.12.2	6.12.2	6.12.2	7.3.2 工作一	7.10.3 アンカーボルト等
						① 高力ボルト、普通ボルト及びアンカーボルトの経路距離、ボルトの間隔、間隔等 ● 埋入	① 構造用アンカーボルトとアンカーフレームの形状並び寸法 ● アンカーボルト等 ② アンカーボルトの保持及び埋込み工法、③ 仕 (ベースプレート) 埋込しモルタルの工法及び厚さ

[illegible][illegible]

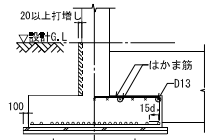
3-2 直接基礎

3-2-1 独立基礎

(1) 正方形基礎



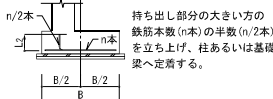
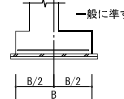
(2) 長方形基礎



- (注) 1 ■印はバーサートを示し、柱の四隅にも配置する。
2 基礎のはかま筋は敷設図示により設ける。

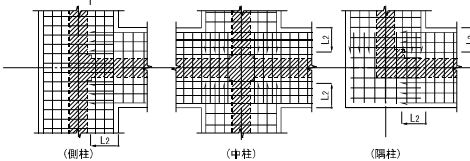
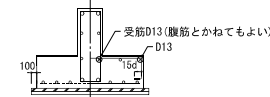
- (注) 1 b1(短辺の幅) この間隔P1 P2 P2 P2 P2 ≤ 2P1
2 特に敷設図示のないときは、長辺方向の基礎筋を下に配筋する。
3 ■印はバーサートを示し、柱の四隅にも配置する。

(3) 偏心基礎の場合



3-2-2 連続基礎

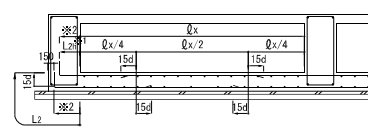
はかま筋のない場合 はかま筋のある場合



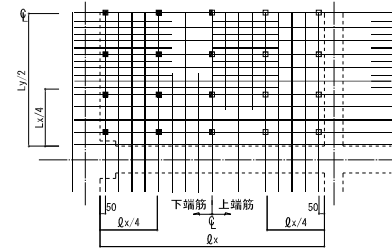
- (注) 1 交差部ベース筋の配筋
2 側柱: 側柱列のみ連続して配筋する。
3 中柱: 主筋量の多い方のみ連続して配筋する。(図は←→方向が多い場合)
4 隅柱: 両方向主筋を配筋し、配筋筋は直交基礎面よりL2の直線定着とする。

3-2-3 ベタ基礎

(1) 基礎スラブ(FS)の配筋

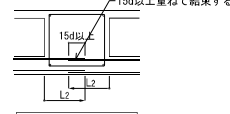
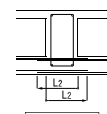


- (注) 1 ※1: L2を確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。
2 ※2: 梁幅Bの2/3以上を確保すること。
3 杭基礎の場合の基礎スラブも同様とする。



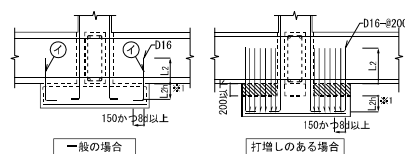
- (注) ■印: 下端筋・バーサート@900程度
□印: うま(上端筋・バーサート@900程度)

(2) 基礎スラブ筋の基礎梁への定着(連続端)

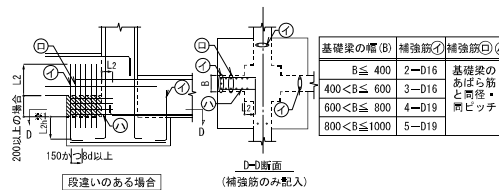


- (注) 引き通し筋としてもよい。
(注) 引き通し筋としてもよい。

3-3 基礎接合部の補強



- (注) 1 はかま筋が基礎梁に入る場合は○を省略できる。
2 ※1: L2を確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。

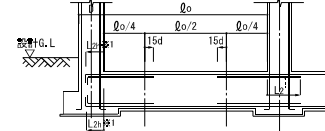


- (注) 1 ■部は基礎梁幅と同幅の打増し部分
2 ※1: L2を確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。

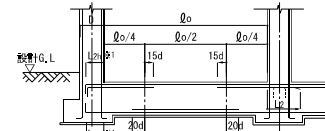
3-4 基礎梁

3-4-1 基礎梁筋の配置と定着(1)、(2)、(3)の選択は、1-4標準配筋要領の特記事項による>

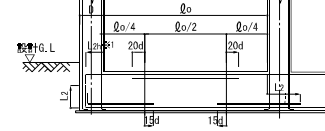
(1) 独立基礎で基礎梁にスラブが付かない場合の主筋の継手、定着及び余長



- (2) 独立基礎で基礎梁にスラブが付く場合の主筋の継手、定着及び余長
ただし、基礎スラブが取付く場合は(3)による



(3) 連続基礎及びべた基礎の場合の主筋の継手、定着及び余長

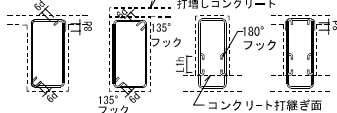


- (注) 1 柱断面が大きくて柱幅内で直線定着長さL2を確保できる場合でも、外端は15dの折曲げを設ける。
2 ※1: L2を確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。

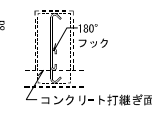
3-4-2 あばら筋、副あばら筋

あばら筋、副あばら筋は大梁のあばら筋の項(5-3)による。
ただし、梁せいが1500mm以上の場合は図面によることができる。

(1) あばら筋



(2) 副あばら筋



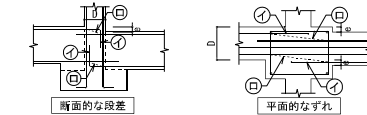
3-4-3 腹筋の割付け本数

腹筋割付け本数は、下表による

D < 600	不要
600 ≤ D < 1050	2-D13
1050 ≤ D < 1500	4-D13
1500 ≤ D < 1950	6-D13
1950 ≤ D < 2400	8-D13

(注) D ≥ 2400は梁成450増すごとに2-D13を加える。

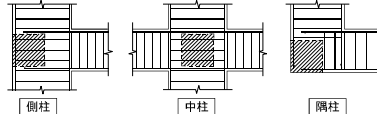
3-4-4 段差のある場合



- (注) 1 左右で基礎梁断面が連続している部分は引き通し配筋とする。
2 左右で基礎梁断面が不連続の部分は柱内(直交する基礎梁幅が柱幅より大きい場合は基礎梁内)に折曲げ定着する○。ただし、e/(D-100) < 1/6の場合は斜め引き通し筋としてもよい○。

3-4-5 基礎梁幅が柱幅より大きい場合の柱・梁交差部のあばら筋

側柱・中柱共、基礎梁幅の大きい方を優先して配筋する。ただし、隅柱の場合は筋筋先行とし、両方向とも柱面まで連続して配筋する。



- (注) 柱の鉄骨が埋め込まれている場合は、ウェブに鉄筋孔を設けず手釦で90°折曲げ加工(余長150mm)としてもよい。

4. 柱

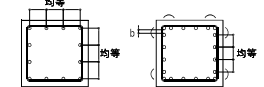
4-1 柱筋

4-1-1 柱主筋の配置と定着及び余長

柱主筋の配置、均等配型・隅部の二段配型の選択は、1-4標準配筋要領の特記事項による。

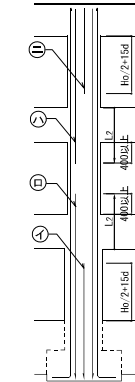
(1) 柱主筋の配置

(a) 均等配型



呼び径	bの標準値
D16~D22	35
D25	40
D29	45
D32	50

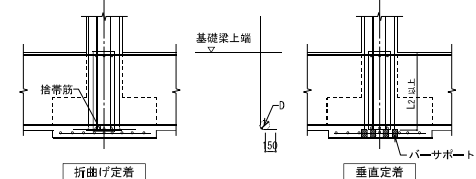
(2) 定着及び余長



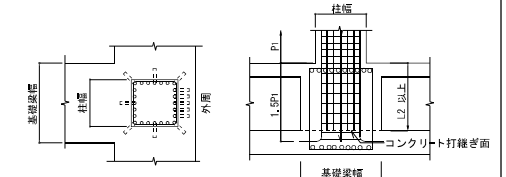
- (注) ①: 柱脚にのみ配筋する鉄筋。
②: 上階より下階の柱筋が多い場合または上階の柱筋に連続しない鉄筋。
③: 下階より上階の柱筋が多い場合または下階の柱筋に連続しない鉄筋。
④: 柱脚より柱頭の柱筋が多い場合の鉄筋。間柱も、これに準ずる。

4-1-2 柱脚部(最下階)の配筋

(1) 一般



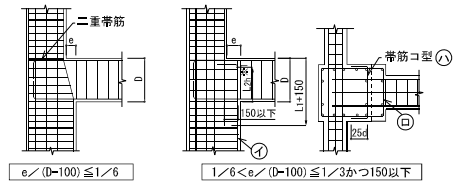
(2) 基礎梁幅が柱幅より大きい柱筋の直線定着長さL2が確保できる場合



- (注) 1 基礎梁内の帯筋ピッチは一般部の1.5倍とする。また中子筋はなしとする。
2 四隅筋及び外周に面する部分の柱筋は、全数下まで降ろす。その他については構造設計者の承認を得て3本に2本程度を打ち継ぎ面で止めてもよい。

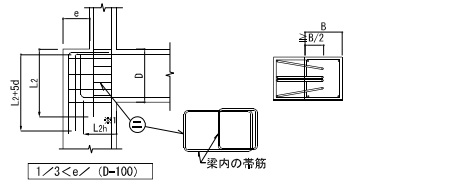
4-1-3 接合部（一般階）

(1)段違いのある場合



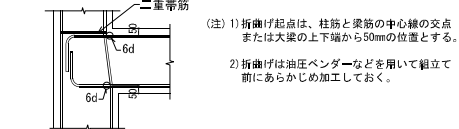
(注) 1) 筋が大梁内で定着長さL2がとれる場合は折曲げなくよい。

- 2) 接合部の帯筋 (ⓐ) は大きい方の断面の帯筋と同径とし、1.5倍ピッチに割付ける。
- 3) 接合部の帯筋 (ⓐ) は小さい方の断面の帯筋と同径とし、コ型で1.5倍ピッチに割付ける。
- 4) ※1: L2nを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。



- (注) 1) 接合部内の帯筋は上下柱の主筋に各々ける (ⓐ)。
- 2) 下階の柱筋の折曲げを現場で行う場合は、常温で正しく行う。
- 3) ※1: L2nを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。

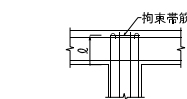
(2) 柱主筋の折り位置



- (注) 1) 折曲げ起点は、柱筋と梁筋の中心線の交点または大梁の上下端から50mmの位置とする。
- 2) 折曲げは油圧ベンダーなどを用いて縦立て前にあらかじめ加工しておく。

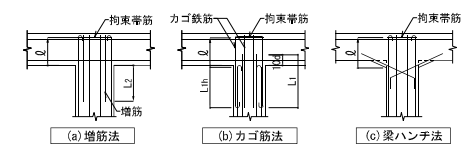
4-1-4 最上階柱頭部の配筋

(1)直線定着長さL2が梁内でとれる場合 (0.2L2)



(2) 直線定着長さL2が梁内でとれない場合 (0.2L2)

下記3法のうちいずれかの方法による。

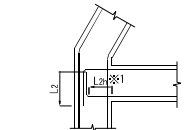


(注) 増筋の径、本数は特配事項による。

(注) 直線定着長さL2を確保できるように梁にハンチを配ける。

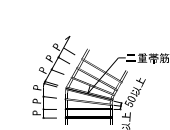
4-1-5 斜め柱の配筋

(1)主筋の配筋

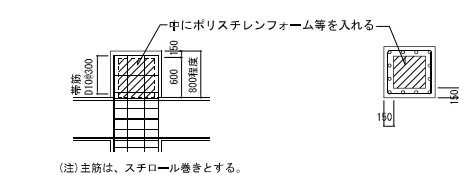


(注) ※1: L2nを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。

(2)帯筋の配筋



4-1-6 得増築用配筋

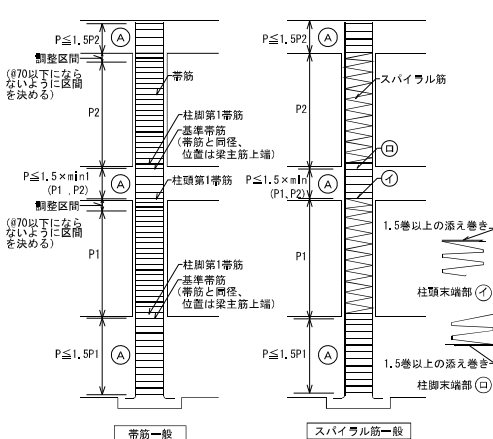


(注) 主筋は、スチロール巻きとする。

4-2 帯筋

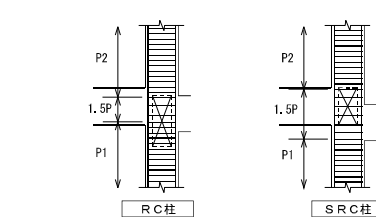
4-2-1 帯筋の割り付け

(1)一般



- (注) 1) 一般部の帯筋、副帯筋の径及びピッチ(P)は配筋図による。
- 2) 接合部 (Ⓐ) の帯筋の径は上下の帯筋径の太い方とする。
- 3) 接合部 (Ⓐ) の帯筋ピッチは1.5倍以内とする。ただし、P1はP1、P2のうち小さい方とする。
- 4) 一般部に副帯筋が配筋されていても接合部 (Ⓐ) には不要としてもよい。ただし、帯筋は0.2%を確保できるようにピッチを調整する。
- 5) 基準帯筋は、帯筋と同径を梁上端主筋の上に配置する。
- 6) 柱頭第一帯筋及びスパイラル筋柱頭巻き端部の位置は梁上端面から50mmとする。
- 7) 柱頭第一帯筋及びスパイラル筋柱頭巻き端部の位置は梁下端面とする。

(2) 梁成、梁レベルに差がある場合

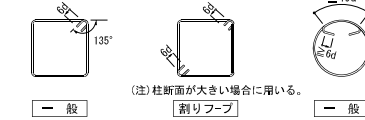


(注) 接合部の帯筋は(1)による。

4-2-2 帯筋の形

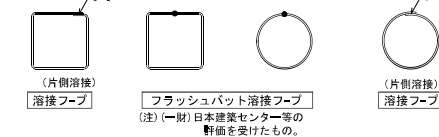
帯筋の形はの選択は、1-4標準配筋要領の特配事項による。

(1)フック付



(注) 帯筋配筋時のフックは1つずつ隅をずらすか対角の隅に交互に配置する。

(2)閉鎖形



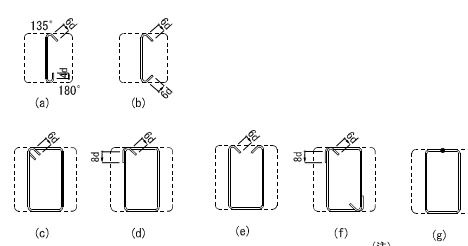
(3)スパイラル



(4)割りフープ（SRC柱の仕口のみ）



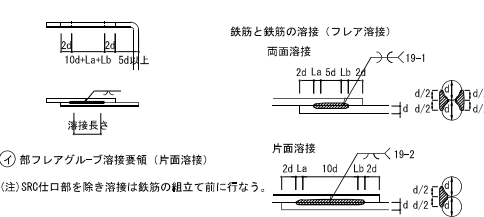
4-2-3 副帯筋の形



(注) (一財) 日本建築センター等の許定を受けたもの

4-2-4 帯筋の溶接要領

フレア溶接の溶接長さ (L) は、ビードの始点 (La) 及びクレーター (Lb) を除いた部分の長さとする。

L: 両面溶接の場合 5d
片面溶接の場合 10d
La及びLb: 1d以上 (d:異形鉄筋の呼び径)

④ 部フレアグループ溶接要領 (片面溶接)

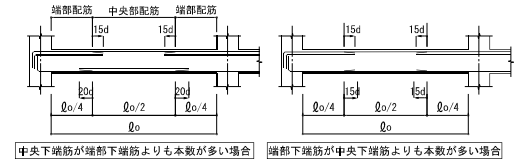
(注) SRC仕口部を除き溶接は鉄筋の組立て前に行う。

5. 大 梁

5-1 梁 筋

5-1-1 端部・中央部の配筋

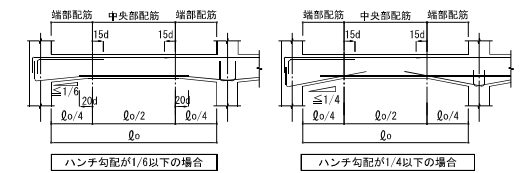
(1)ハンチのない場合



中央下端筋が端部下端筋よりも本数が多い場合

端部下端筋が中央下端筋よりも本数が多い場合

(2)ハンチのある場合



ハンチ勾配が1/6以下の場合

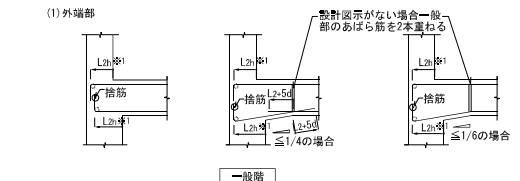
ハンチ勾配が1/4以下の場合

- (注) 1) 構造図に配載しない場合、ハンチの始端は0.4/0.4の点とする。
- 2) 傾きが1/6以下の場合は折り曲げて通し筋としても良い。

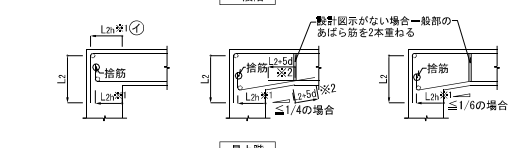
5-1-2 定 着

梁主筋の柱への定着は折曲げ定着とする。

下端筋の定着を曲下げとする場合は構造設計者の承認を得ること。

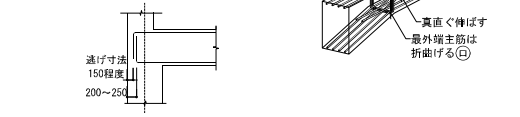


(注) 1) ※1: L2nを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。



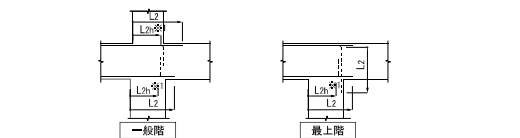
(注) 1) ※1: L2nを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。

- 2) 下端筋は、構造設計者の承認を得て曲下げとしてもよい。
- 3) ※2: 最外端主筋は折曲げて通す (ⓐ)。
- 4) 筋筋はD10以上とする。
- 5) 定着テールの逃げ付法は下図を標準とする。



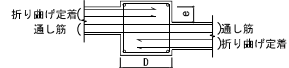
(2)連続端

連続端では折り曲げ定着しないで通し配筋とするが、左右の梁の主筋本数が異なる場合、その異なった鉄筋は下図に従いL2直線定着(実線表示)又は柱内へ定着(破線表示)とする。



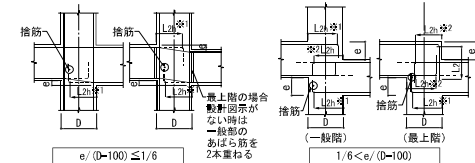
(注) ※1: L2nを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。

(3) 平面的なずれのある場合



(注) 左右の梁のずれ[e/D]が1/6以下配り直した場合は鉄筋を折り曲げて連続させてもよい。

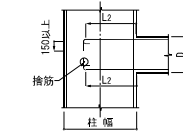
(4) 段差がある場合



- (注) 1) ※1: L2hを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。
 2) ※2: L2の直線定着としてもよい。
 3) 下端筋は下向き定着としてもよい。
 4) 筋はD10以上とする。

(5) 柱幅が大きい場合の定着

柱幅が梁せいの2倍以上ある場合は直線定着としてもよい。



- (注) 1) 柱幅内で所定の定着長さL2がとれる場合でも柱中心線をこえて折曲げアール長150mm以上をとるか、またはフックありとする。
 2) 下端筋定着は、構造設計者の承認により下向き定着としてもよい。

(6) SRC柱の場合の定着

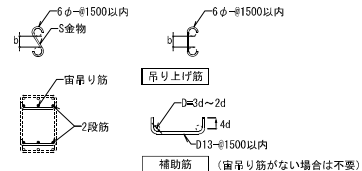
ウェブ貫通とする。ただし、柱の中心線を越えて折曲げ定着できる場合は貫通させなくてもよい。ただし、片持梁は除く。

5-1-3 2段配筋

- (1) 2段配筋の鉄筋のあきbは、1.5dかつ最大粗骨材径の1.25倍以上とする。
 鉄筋径の異なる場合は大きい方の径による。RC造の場合およびその目安は下表による。
 SRC造の場合は溶接基準図-1に準ずる。

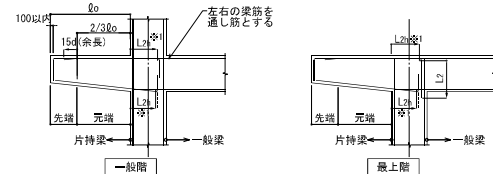
呼び名径	bの標準値
D16～D22	35
D25	40
D29	45
D32	50

- (2) 2段筋のあき確保のため、下図の早上げ筋あるいは補助筋を使用する。



5-2 片持梁

片持梁の梁筋は柱に定着する。ただし構造設計者の承認を得て通し筋としてもよい。

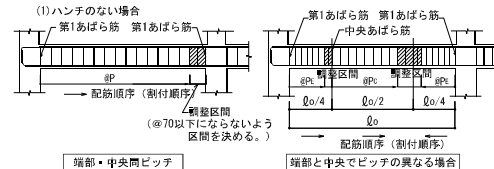


- (注) 1) ※1: L2hを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。
 2) 片持梁の上端梁筋には継手を繋げてはならない。
 3) 片持梁の下端梁筋は下向き定着としてもよい。

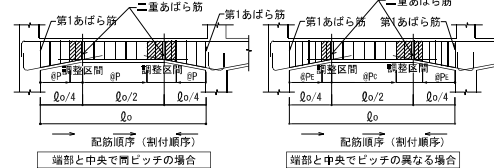
5-3 あばら筋

5-3-1 あばら筋の割付け

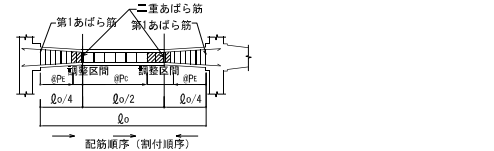
第1あばら筋の位置は、柱コンクリート面とする。



(2) 鉛直ハンチのある場合

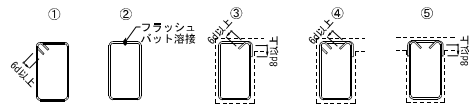


(3) 水平ハンチのある場合



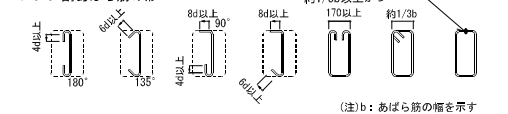
(注) 隔壁区間は、あばら筋の間隔が70mm以下にならないよう区間を決める。

5-3-2 あばら筋の形及びフックの位置



- (1) あばら筋組立ての形は①または②とし、フックの位置は交互とする。
 (2) し形梁の場合は③又は④とすることができ、フックはスラブのある側に繋げる。
 (3) T形梁の場合は③～⑤とすることができ、③と④のフックの位置は交互とする。
 (注) SRC造の場合、フック先端が鉄骨フランジと干渉する時は180°フックとする。

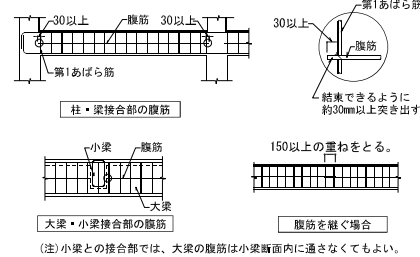
5-3-3 副あばら筋の形



(注) b: あばら筋の幅を示す

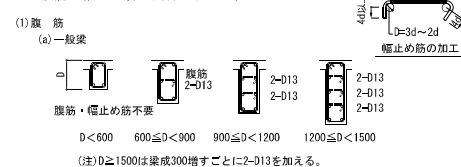
5-4 腹筋及び幅止め筋

5-4-1 腹筋の定着及び継手

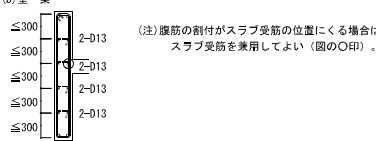


(注) 小梁との接合部では、大梁の腹筋は小梁断面内に通さなくてもよい。

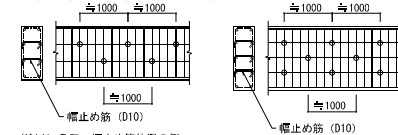
5-4-2 腹筋・幅止め筋の割付け及び配筋



(注) D ≥ 1500は梁成300増すごとに2-D13を加える。



(2) 幅止め筋

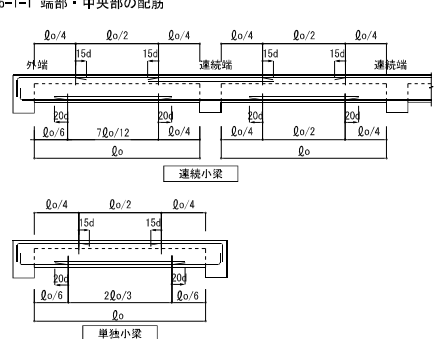
腹筋が段以上の場合は、幅止め筋を1ヶ所に集中させず平角に配置する。
 なお、幅止め筋のあばら筋の位置に入れる。

- (注) 1) ○印: 幅止め筋位置の例
 2) 幅止め筋のピッチは1,000mm程度
 3) SRC造の場合は幅止め筋を省略することができる。

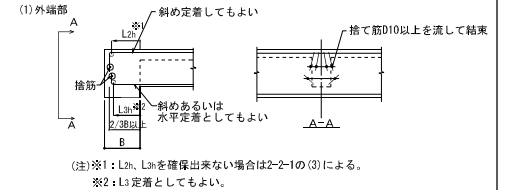
6. 小梁

6-1 梁筋

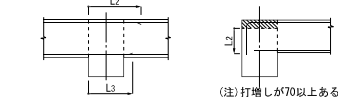
6-1-1 端部・中央部の配筋



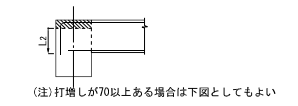
6-1-2 定着



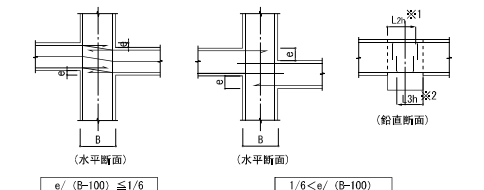
(2) 連続端



(3) 梁に打増しがある場合



(4) 平面的なずれのある場合



- (注) 通し筋としてよい。ただし折曲げ起点は、大梁面より50mmとする。
 (注) 1) ※1: L2h, L3hを確保出来ない場合は2.2.(1)による。
 2) ※2: L3定着としてもよい。
 3) 直線で連続する位置の梁筋は通し筋筋としてよい。

(5) 段差がある場合

5-1-2 (4) 大梁に準ずる

(6) 大梁がSRCの場合

- (a) 上筋の定着は、全て鉄骨を貫通させて行う。
 (b) 下筋の定着は、鉄骨ウェブ手前で折曲げ定着としてもよい。

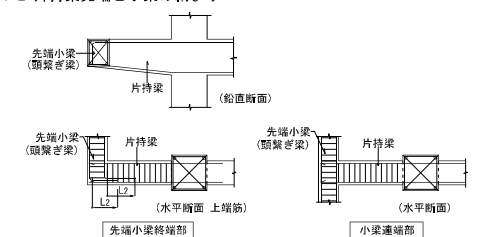
6-1-3 2段配筋

5-1-3 大梁に準ずる。

6-1-4 片持小梁

5-2 大梁に準ずる。

6-2 片持梁先端と小梁の納まり



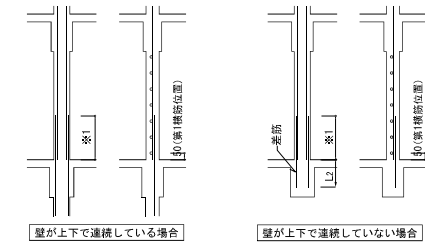
6-3 あばら筋・腹筋及び幅止め筋

5-4 大梁に準ずる。

7. 壁

7-1 一般要領

7-1-1 耐震壁及び一般壁



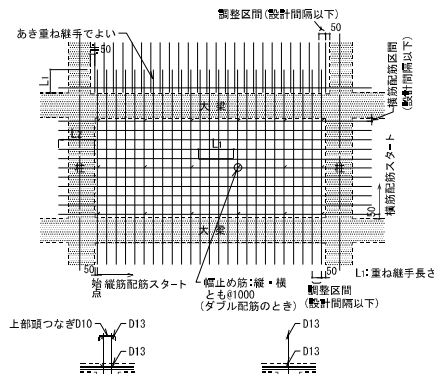
壁が上下で連続している場合

壁が上下で連続していない場合

※1 重ね継手長さは下配とする。

一般壁：L1

耐震壁：40d(経量コンクリートの場合は50d)とL1のいずれか大きい値



(注)1) コンクリート打設時に、壁筋の乱れを防ぐため図のように鉄筋を流し、壁筋と結束する。

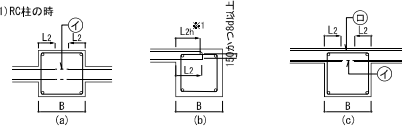
2) 合面しは行わない。

3) 耐震壁符号:SW、一般壁符号:W。

7-2 定着

7-2-1 柱への定着

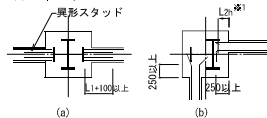
(1) RC柱の時

(注)1) ※1: L₂hを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。

2) ⑦の部分は通し配筋としてもよい。

3) ⑧の部分は通し配筋とする。

(2) SRC柱の時

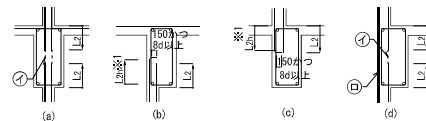
(注)1) ※1: L₂hを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。

2) 異形スタッドは壁筋と同径・同ピッチとする。

ただし、径はD13以上を使用すること。

7-2-2 梁への定着

(1) RC梁の時

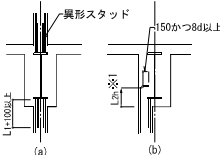
(注)1) ※1: L₂hを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。

2) ⑦の部分は通し配筋としてもよい。

3) ⑧の部分は通し配筋とする。

4) 地下外壁の定着は7-2-4による。

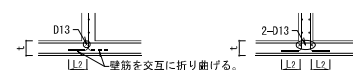
(2) SRC梁の時

(注)1) ※1: L₂hを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。

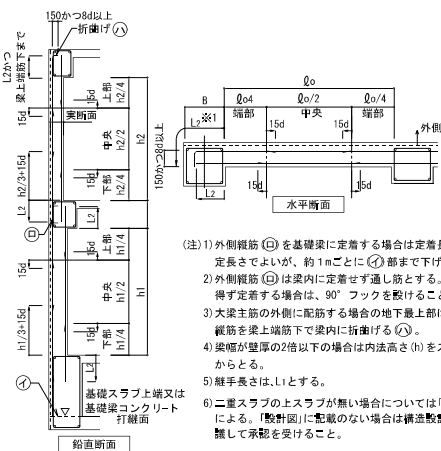
2) 異形スタッドは壁筋と同径・同ピッチとする。

ただし、径はD13以上を使用すること。

7-2-3 スラブへの定着(非耐震壁とスラブが取り合う場合)

(注) 直線定着長さL₂とする。

7-2-4 地下外壁の配筋



(注)1) 外側鉄筋 ②を基礎梁に定着する場合は定着長さは規定長さより、約1mごとに④部まで下げる。

2) 外側鉄筋 ③は梁内に定着せず通し筋とする。やむを得ず定着する場合は、90°フックを設けること。

3) 大梁スラブの外側に配筋する場合の地下最上部は、外側鉄筋を梁上端筋下で梁内に折曲げる ⑤とする。

4) 梁幅が壁厚の2倍以上の場合は内法高さ(h)をスラブ下からとる。

5) 継手長さはL₁とする。

6) 二重スラブの上スラブが無い場合については「配筋図」による。「配筋図」に配筋のない場合は構造設計者と協議して承認を受けること。

7-3 壁交差部の納まり

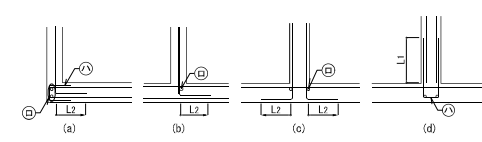
7-3-1 シングル配筋とシングル配筋



(注)1) (a)～(d)はいずれを用いてもよい。

2) L字筋 ⑦は横筋と同径・同間隔とする。

7-3-2 ダブル配筋とシングル配筋

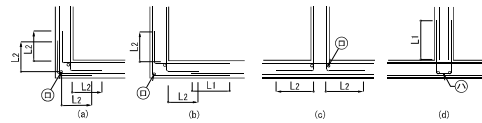


(注)1) (a)～(d)はいずれを用いてもよい。ただし、(d)の採用は構造設計者の判断による。

2) コーナ筋 ⑧は縦筋、横筋のうちの最大径かつD13以上。

3) コ型筋 ⑨は横筋と同径・同ピッチとする。

7-3-3 ダブル配筋とダブル配筋



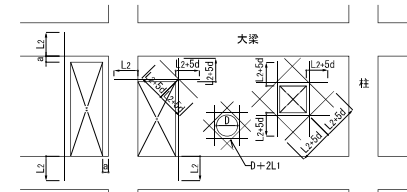
(注)1) (a)～(d)はいずれを用いてもよい。ただし、(d)の採用は構造設計者の判断による。

2) コーナ筋 ⑧は縦筋、横筋のうちの最大径かつD13以上。

3) コ型筋 ⑨は横筋と同径・同ピッチとする。

7-4 開口補強要領

7-4-1 単独開口の補強

(注)1) 定着長さはL₂5dとし、柱・梁に定着する場合は直線定着でL₂とする。

2) 補強筋は壁リストによる。

3) 補強筋は規定の壁配筋以外に入れる。

4) 開口最大寸法が150mm未満の場合は補強筋不要。

ただし、縦筋・横筋を切断した場合は、両面断面以上の鉄筋を周囲に入れL₂5d以上定着する。

5) 開口が柱・大梁に接している場合は、その部分の補強筋は不要。

6) a ≦ 70の場合は補強筋不要。

7) 開口ピッチは隣接する開口寸法の平均の3倍以上とする(左図)。

8) 壁の端部は開口補強の枠を配置し、開口小口補強も行う。

9) 開口部の小口補強は壁厚が200を超える耐震壁を対象とし下表による。

なお、コ型補強筋は壁筋と同径・同ピッチとする。

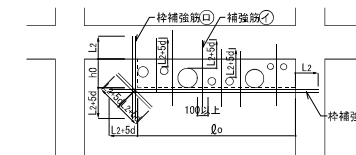
	コ型補強筋が外側の場合	壁筋にフックを設けた場合
水平断面		

(注) 鉛直断面もこれに準ずる。

7-4-2 開口群の補強

開口間隔が隣接する開口径の平均値の3倍以下の場合は開口群を一つの開口として扱う。その場合構造壁理担当者や協議のうえ下配による。

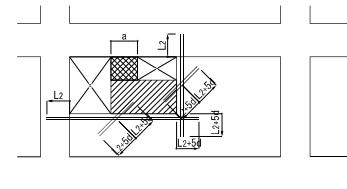
(1) 円開口の場合



(注)1) 0. h0寸法を開口寸法とし補強筋は配筋図による。

2) 開口間の壁筋は切断しないこと。やむを得ず切断した場合には補強筋 ⑦を入れる。定着長さは個別開口端よりL₂5dとする。3) 枠補強筋 ⑧は壁筋と同径とし、定着長さは個別開口端よりL₂5dとするか、柱・梁に直線定着でL₂とする。

(2) 角開口の場合



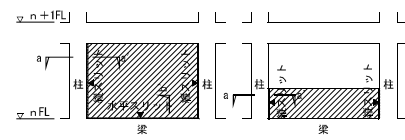
(注)1) 隣接する開口のあき a が300mm以下の場合は一つの開口として扱う。

2) ⑧ 印部分の縦筋は所定の壁筋と同径・同ピッチかつ150mm以下で配筋する。

3) ⑨ 印部分は所定の壁配筋を行う。

7-5 構造スリット

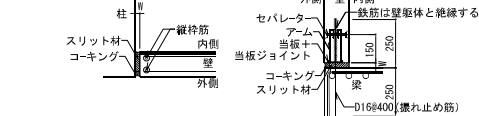
構造スリットの位置は配筋図による。またその性能は構造特配仕様書による。



(a-a') 縦スリット詳細図

(b-b') 水平スリット詳細図

W=構造スリット幅(特配による) W=構造スリット幅(特配なき限り25mmとする)



(注)1) スリット部小口には縦鉄筋を入れる。

2) 工業化製品を用いる場合は、鉄筋・種類について構造設計者の承認を受ける。

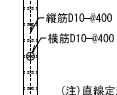
3) 開口端とスリットで挟まれた壁の幅は、400以上を確保すること。

4) 壊れ止の筋には防錆処理を行うこと。

5) 壁筋のスリット材からのかり厚さを確保すること。

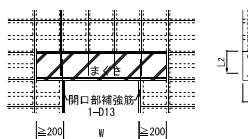
7-6 ブロック壁

(1) 配筋

(注) 直線定着長さはL₂とする。

(2) 開口補強

W	まぐさのせい	上筋	下筋	あばら筋
W ≦ 1,000	200	1-D13	1-D13	D10-φ200
1,000 < W ≦ 2,000	400	1-D13	1-D13	D10-φ200

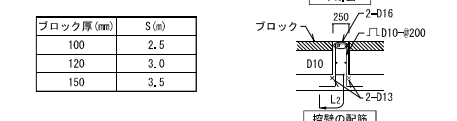


(注)1) b: ブロック厚以上

2) あばら筋フックは180°

(3) 控壁

ブロック積みの高さかつスパンがS以上の場合は、右図のように控壁を入れてスパンがS以下になるようにする。

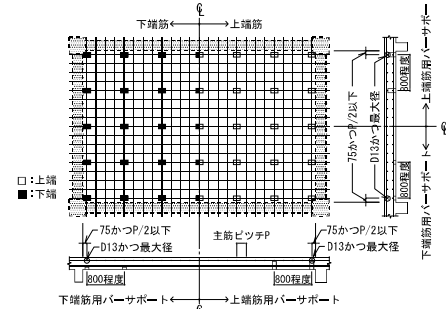


ブロックの配筋

8. スラブ

8-1 一般要領

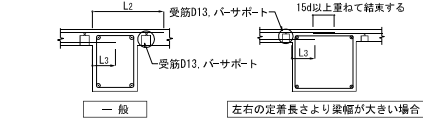
- (1) 主筋は上端筋、下端筋とも配筋筋の外側に配筋する。
 (2) 配筋は中央から割り付け、端部は定められた間隔の1/2以下とする。
 (3) スラブ下に断材等を打ち込み、上端筋に底振付のバーサポートを用いる場合は、下端筋を上端筋より50mm程度ずらして配筋する。



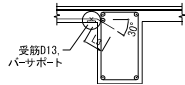
(注) バーサポートは梁間に必ず配置し、800mm程度に割付け。

8-2 定着

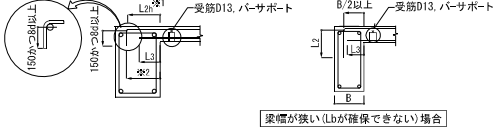
(1) 両側スラブの場合



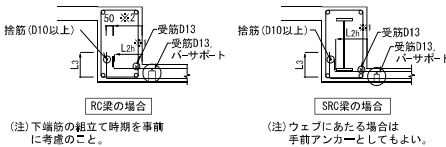
(注) スラブ下端筋が梁の2段筋に当たる場合は、下図のように折曲げ定着する。



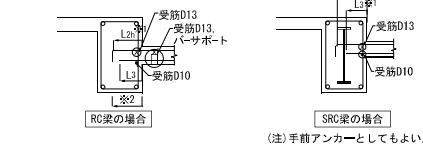
(2) 片側スラブの場合



(3) 逆スラブの場合



(4) 梁の中間にスラブがつく場合



(1) ~ (4) の共通の注意事項は下記とする

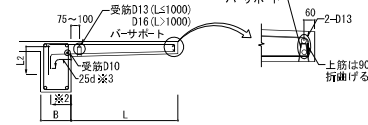
- ※1: L2h, L3hを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。
 ※2: 梁幅の2/3以上を確保すること。

8-3 片持スラブ

8-3-1 定着

片持ちスラブ筋は梁に折曲げ定着すること。

(1) 隣接スラブと同一レベルの場合

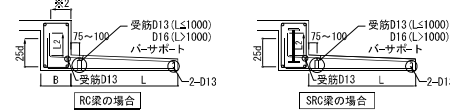


直線定着は以下の場合に採用してもよい。

片持ちスラブの主筋と同様・同ピッチ

- (注) 1) ※2は2B/3以上かつLa以上
 2) ※3は全長を25dを確保して直線定着としてもよい。

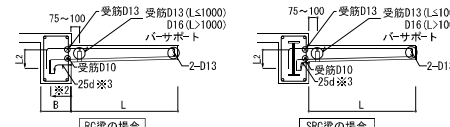
(2) 逆スラブの場合



(注) 1) 下端筋の組立て時期を事前に考慮のこと。

2) ※3は2B/3以上かつLa以上

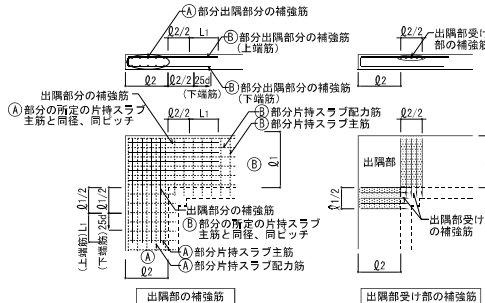
(3) 梁中間にスラブのつく場合



(注) 1) ※2は2B/3以上かつLa以上

2) ※3は全長を25dを確保して直線定着としてもよい。

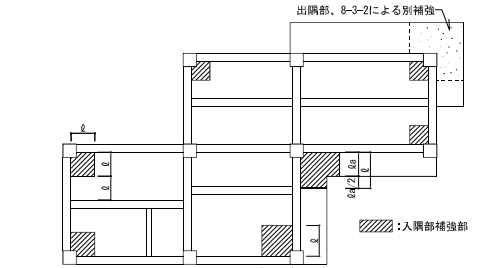
8-3-2 出隅部分補強配筋



(注) 1) 出隅受け部補強筋の径は、片持ちスラブ筋の1サイズアップとし、所定の上端筋の間に5本配筋する。

2) 出隅受け部補強筋の定着長はL1とする。

8-4 屋根スラブ出隅、入隅部の補強



(補強法)

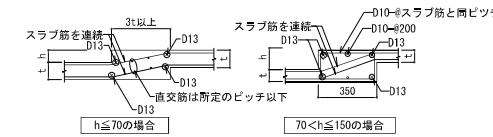
- 1) 上端筋の間隔が8100以下となるようにスラブ筋と同径筋により補強する。
 2) 構造監理担当者の承認を得て溶接金網φ6-8100あるいはφ6-875で補強することができる。

(注) 1) ①は建込内法パンの1/2 または1500の小さい方の値とする。

2) 補強筋は柱内面より梁内へ所定の定着 (定着長さL2) を行う。

8-5 特殊部分の配筋

8-5-1 スラブ中間の段差部



直交筋は所定のピッチ以下

70<h≦150の場合

150<h≦2tの場合

(注) 1) やむを得ない場合、斜め筋は短く加工してスラブ筋に添えてよい。

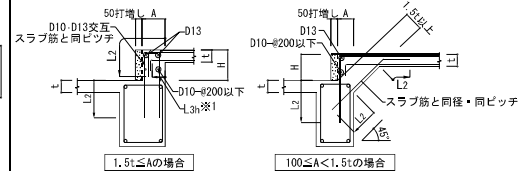
その場合、継手長さはL1とする。

2) ※1: Lhを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。

3) ※2: 欄の3/2以上を確保する。

8-5-2 梁よりスラブが高い場合

(1) 壁のない場合

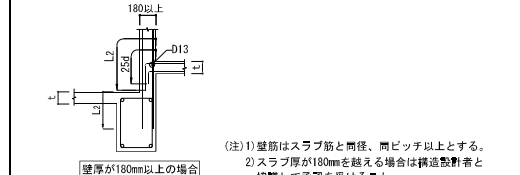


(注) 1) Aが100mm以下の場合の要領は、8-5-1に準じる。

2) Hは400mm以下とする。

3) ※1: Lhを確保出来ない場合は2-2-1の(3)による。

(2) 壁のある場合

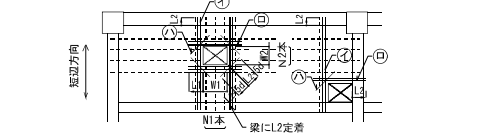


(注) 1) 壁筋はスラブ筋と同径、同ピッチ以上とする。

2) スラブ厚が180mmを超える場合は構造監理者と協議して承認を受けること。

8-6 開口部補強要領

8-6-1 単独開口



W1: 主筋と直交する開口寸法
 W2: 配筋材と直交する開口寸法

開口寸法	150<W2≦400	400<W2≦700	700<W2≦1000
上下各1-D13	上下各1-D13	上下各1-D13	上下各2-D13
上下各2-D13	上下各2-D13	上下各2-D13	上下各3-D13
2-D10	2-D10	2-D10	2-D13
上下各2-D13	上下各2-D13	上下各2-D13	上下各3-D13
上下各1-D13	上下各1-D13	上下各2-D13	上下各3-D13
2-D10	2-D10	2-D10	2-D13
上下各3-D13	上下各3-D13	上下各3-D13	上下各3-D13
上下各1-D13	上下各1-D13	上下各2-D13	上下各3-D13
2-D13	2-D13	2-D13	2-D13

(注) 1) 補強筋①及び②は、上表の値かつ切断した鉄筋N1、N2の1/2本以上とする。

2) W1、W2共400mm以下の場合は①は梁に定着せず開口端部より定着長さL2+5dをとる。

3) 開口の最大寸法Wが150mm未満の場合は補強不要。

ただし、開口ピッチは全てで隣接する開口寸法の平均3倍以上とする((a)図)。

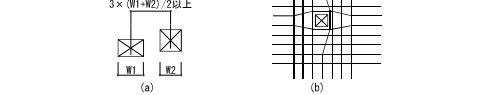
またスラブ筋を切断しないことを条件とする。

4) スラブ開口の最大径が両方向の配筋間隔以下で、鉄筋をゆるやかに曲げるか鉄筋を

ずらすことにより、開口部を避けて配筋出来る場合は補強を省略することができる

((b)図)。やむを得ず鉄筋を切断した場合は、切断した鉄筋同径以上又は同鉄筋量

以上を配筋する。



5) 開口の最大寸法Wが1000を超える場合は、開口周辺に小梁等の特別の補強を要する。

小梁が設けられない場合の補強方法は構造監理担当者や協議して承認を受けること。

6) 開口が円形の場合、開口直径φをW1によりみかえる。

7) 貫通孔及び取りつける器具の位置は配筋側に型枠に書きしまたは箱入れをし、貫通

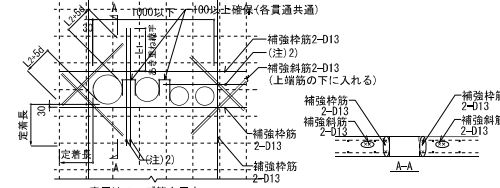
孔用スリーブ内に鉄筋を貫通させてはならない。

8-6-2 連続開口

シャフト内の貫通等で開口ピッチの芯々が隣接する開口寸法の平均3倍以上とれない

場合は、下図の要領で補強を行う。

実際の補強方法を計画し、構造監理担当者の承認を受けること。



--- 表示はスラブ筋を示す。

(注) 1) 補強筋の定着長は単独開口に違い、建込方向については梁にL2直線定着、長辺方向

は開口端部よりL2+5dとする。

2) 貫通孔によりやむを得ず鉄筋を切断した場合は、切断した鉄筋同径以上又は同鉄筋

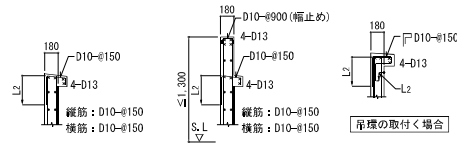
量以上を配筋する。(上図の場合は2本切断しているが、2本の鉄筋を配筋している)

3) 切断した鉄筋同径以上または同鉄筋量以上を配筋出来ない場合は、8-6-1の単独開口

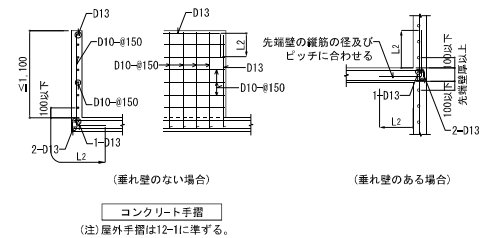
に倣う。

12. 標準詳細図

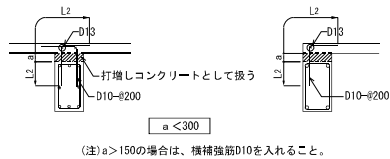
12-1 バラベット



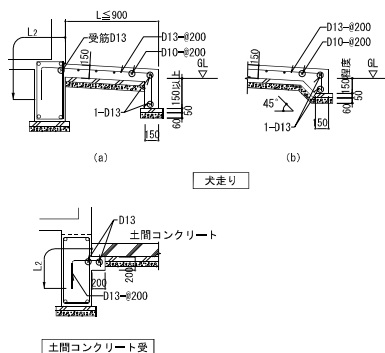
12-2 手摺



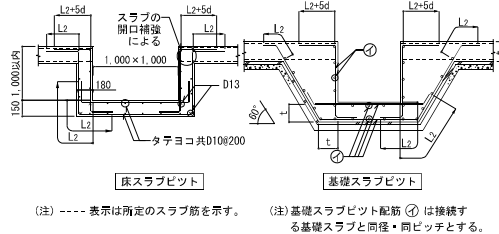
12-3 土間コンクリートの打継ぎ補強



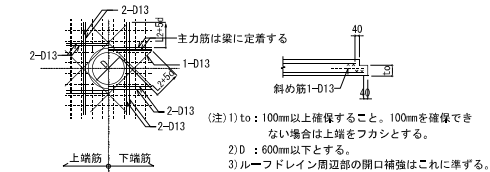
12-4 犬走りおよび土間コンクリート受



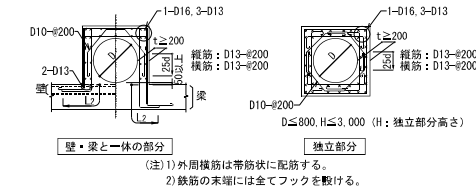
12-5 スラブリット



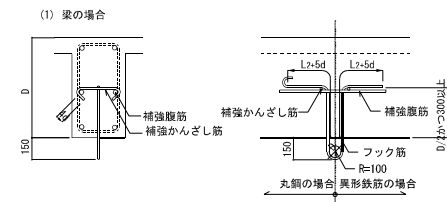
12-6 マンホールの補強（スラブ欠き込みの場合）



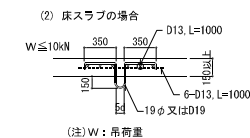
12-7 煙突



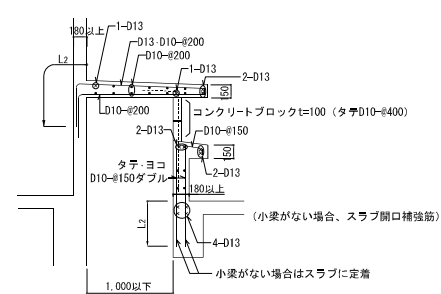
12-8 機械吊上げ用フック



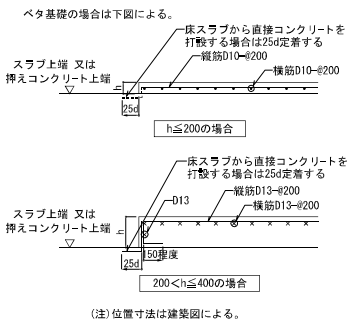
機 械 吊 上 げ 用 フ ッ ク	A 種	B 種	C 種
フック筋	φ25又はD25	φ22又はD22	φ19又はD19
吊げ内のり直径(mm)	100		
補強かんざし筋	2-D16		
補強筋(mm)	D16, L=500	D16, L=750	D16, L=600
吊り上げ荷重 (kN)	50≧W>30	30≧W>10	10≧W



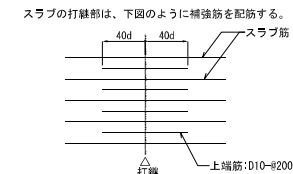
12-9 屋上小屋類



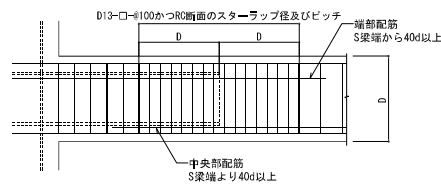
12-10 設備機器基礎



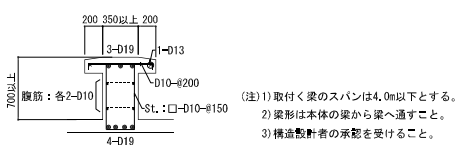
12-11 打継部補強要領



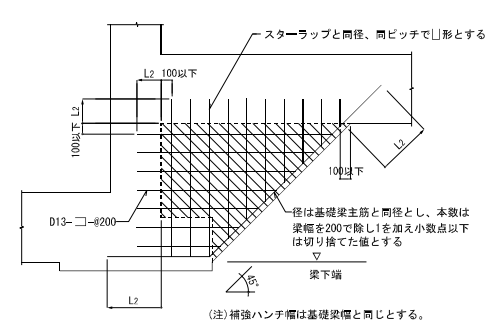
12-12 SRC, RC切替部要領



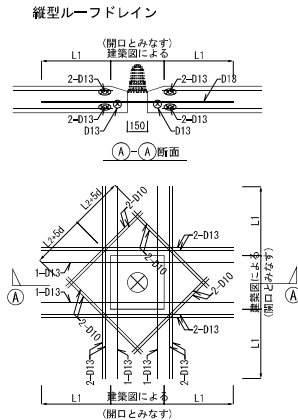
12-13 高架水槽基礎



12-14 バットレス補強要領



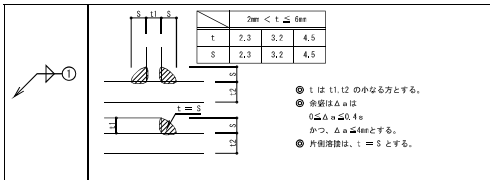
12-15 ルーフドレイン 開口補強要領



14YOS-I_20210301_UFANA.DWG	
图号	S-2014
区	注册建造师

(注) f: 余置 G: ルート間隔 R: フェース
S: 歯長 (単位: mm)

(1) スミ肉溶接



		一般		柱・梁仕口部																																																													
$t \leq 16$		$t > 16$		$t < 16$																																																													
注) t はt₁, t₂の薄い方の板厚とする。		注) t はt₁, t₂の薄い方の板厚とする。		注) t はt₁, t₂の薄い方の板厚とする。																																																													
<table> <tr> <th>t</th><td>6</td><td>9</td><td>12</td><td>14</td><td>16</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>S</td><td>5</td><td>7</td><td>9</td><td>10</td><td>12</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table> (サイズ)		t	6	9	12	14	16					S	5	7	9	10	12					<table> <tr> <th>t</th><td>19</td><td>22</td><td>25</td><td>28</td><td>32</td><td>36</td><td>40</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>a</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>12</td><td>14</td><td>16</td><td></td><td></td></tr> </table> (サイズ)		t	19	22	25	28	32	36	40			a	7	8	9	10	12	14	16			<table> <tr> <th>t</th><td>6</td><td>9</td><td>12</td><td>14</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>S</td><td>7</td><td>9</td><td>11</td><td>13</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table> (サイズ)		t	6	9	12	14						S	7	9	11	13					
t	6	9	12	14	16																																																												
S	5	7	9	10	12																																																												
t	19	22	25	28	32	36	40																																																										
a	7	8	9	10	12	14	16																																																										
t	6	9	12	14																																																													
S	7	9	11	13																																																													
$\angle 16$		$\angle 17$																																																															
注) 脚長は板厚の異なる場合は薄板(t)にて決定する。																																																																	
<table> <tr> <th>t</th><td>6</td><td>9</td><td>12</td><td>14</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>S</td><td>5</td><td>8</td><td>11</td><td>13</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table> (サイズ)		t	6	9	12	14						S	5	8	11	13						<table> <tr> <th>サイズ</th><th>t</th><td>6</td><td>7</td><td>9</td><td>10</td><td>12</td><td>13</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>S1</td><td></td><td>8</td><td>10</td><td>14</td><td>14</td><td>17</td><td>17</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>S2</td><td></td><td>4</td><td>5</td><td>7</td><td>7</td><td>10</td><td>10</td><td></td><td></td></tr> </table>		サイズ	t	6	7	9	10	12	13			S1		8	10	14	14	17	17			S2		4	5	7	7	10	10														
t	6	9	12	14																																																													
S	5	8	11	13																																																													
サイズ	t	6	7	9	10	12	13																																																										
S1		8	10	14	14	17	17																																																										
S2		4	5	7	7	10	10																																																										
$\angle 18$		$\angle 19$		$\angle 20$																																																													
$\angle 18-1$		$\angle 19-1$		鉄筋と鉄板の溶接（フレア溶接）																																																													
		鉄筋と鉄筋の溶接（フレア溶接） 標準配筋要領「4-2-4 帯筋の溶接要領」参照																																																															
$\angle 18-2$		$\angle 19-2$		$\angle 21$																																																													
注) aはどの厚を示し、tはt₁-t₂の薄い方の板厚かつ3.2mm以上とする。		鉄筋と鉄筋の溶接（フレア溶接） 標準配筋要領「4-2-4 帯筋の溶接要領」参照		鉄筋と鉄板の溶接（フレア溶接） 																																																													

○ 鋼材種別による溶接条件

溶接材料		溶接材料と入熱量・バス間温度	
鋼材の種類	溶 接 材 料	入 熱 (kJ/cm)	バス間温度 (°C)
400 N/mm ² 級鋼	JIS Z 3312	40 以下	350 以下
	YGW-11・15		
	YGW-18・19		
	JIS Z 3315		
	YGA-SOW・50P		
490 N/mm ² 級鋼	JIS Z 3312	40 以下	350 以下
	YGW-11・15	30 以下	250 以下
	YGW-18・19	40 以下	350 以下
	JIS Z 3315	40 以下	350 以下
	YGA-SOW・50P	40 以下	350 以下

- 注)・STKR・BCR・BCP は JIS Z 3312、のみ使用可
・「構造設計仕様書 6.鉄骨工事 (2) 認定または登録工場」のグレート別に定められた適用範囲と溶接条件制限事項による。

継手基準図

(1) 高力ボルト・中ボルト・アンカーボルトピッチ (P)

(7) 高カホルド・中カホルド・フカホルドとビッチ (P)					ボルト穴径・最小線端距離 (mm)		
呼び径 d	ボルト穴径	最小線端距離 (e)			ビッチ (P)		
		(1)	(2)	(3)	(3)・(3)間隔	最小	標準
M12	14.0	30	22	18	30	30	50
M16	18.0	40	28	22	40	40	60
M20	22.0	50	34	26	40	50	60
M22	24.0	55	38	28	40	55	60
M24	26.0	60	44	30	45	60	70
フカホルド・中カホルド・高カホルドとボルト穴径・最小線端距離 (mm)	M16	21 (16.5)	28	22	(40)	(40)	(60)
	M20	25 (20.5)	34	26	(40)	(50)	(60)
	M22	27 (22.5)	38	30	(45)	(55)	(60)
	M24	29 (24.5)	44	32	(45)	(60)	(70)
	M27	32.0	49	36			
	M30	35.0	54	40			
呼び径 d	呼び径+5		3d/5	4d/3			
	以上						

- [注] (1) 引張材の接合部で応力方向にボルトが3本以上並ばない場合の応力方向の縁端距離
(2) せん断縁・手動ガス切断縁の場合の縁端距離
(3) 圧延縁・自動ガス切断縁・のこ引き縁・機械仕上縁の場合の縁端距離

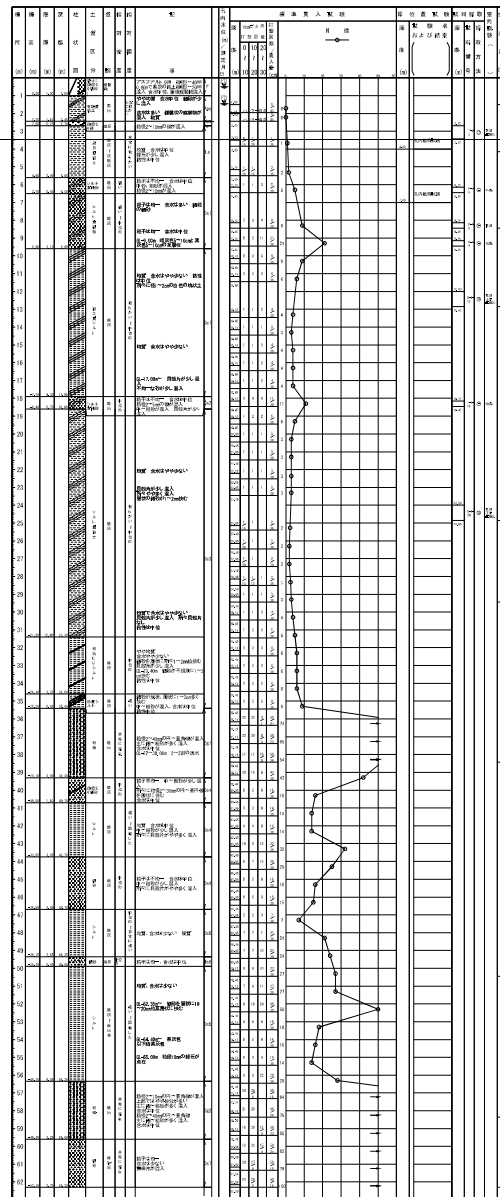
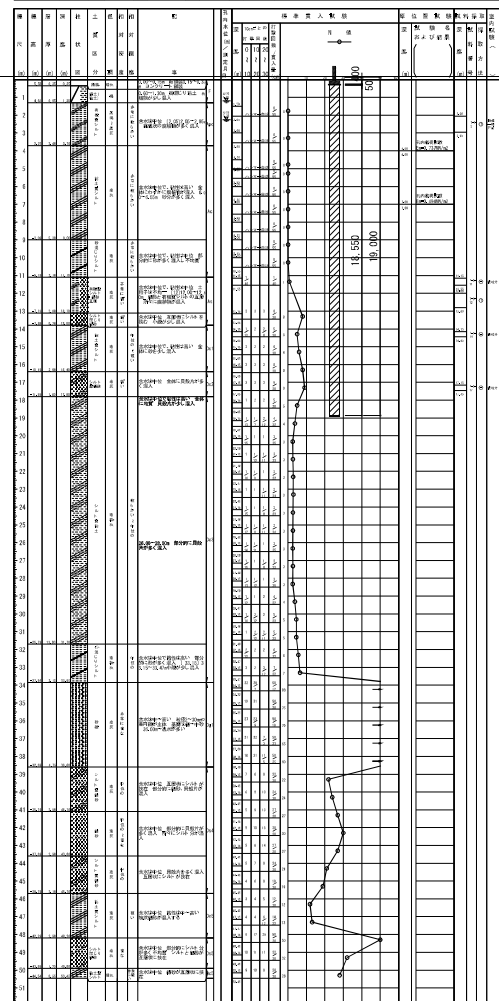
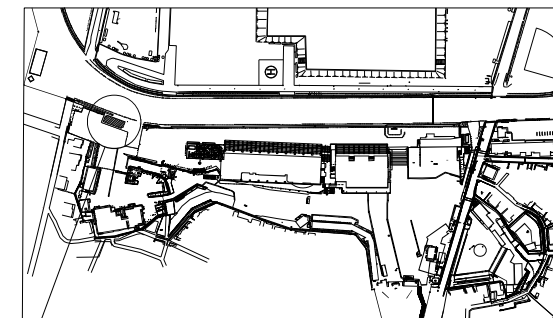
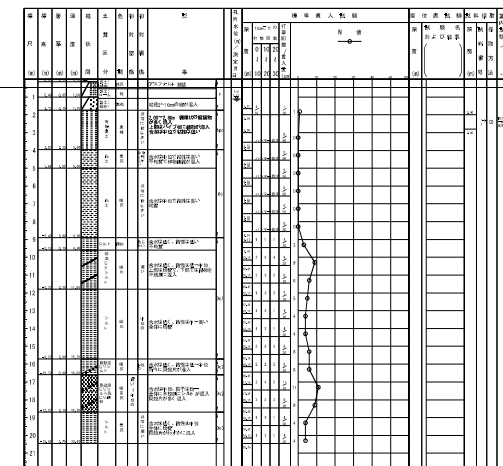
その他

特記仕様書7.6.3は、突き合わせ溶接箇所に適用する。

突き合わせ溶接以外の溶接技能者は、下記のいずれかを保有している者とする。

- (1) SFiI-HとSFII-Vを共に保有している者
- (2) FII-HとFII-Vを共に保有している者
- (3) 施工する溶接に適應するJIS Z 3801(手溶接)またはJIS Z 3841(半自動溶接)の溶接技術検定試験に合格し引続き、半年以上溶接に従事している者

ホーリング名	M-4	製造年度	平成23年11月25日 平成24年7月6日		況	良
採出場所	埼玉県浦和市	製造時期	平成23年2月30日 ~ 24年2月20日		採	出
製造業者名	株式会社 日本ホーリング株式会社	製造時期	平成23年2月30日 ~ 24年2月20日	製造	時期	平成23年2月30日 ~ 24年2月20日
ホーリング名	M-4	製造年度	平成23年11月25日 平成24年7月6日		況	良
採出場所	埼玉県浦和市	製造時期	平成23年2月30日 ~ 24年2月20日		採	出
製造業者名	株式会社 日本ホーリング株式会社	製造時期	平成23年2月30日 ~ 24年2月20日		製造	時期
ホーリング名	M-4	製造年度	平成23年11月25日 平成24年7月6日		況	良
採出場所	埼玉県浦和市	製造時期	平成23年2月30日 ~ 24年2月20日		採	出
製造業者名	株式会社 日本ホーリング株式会社	製造時期	平成23年2月30日 ~ 24年2月20日		製造	時期


$$\nabla \text{設計} \text{GL} = \text{T. P.} + 6.05\text{m}$$
[illegible][illegible]

ボーリング位置図

